
白と黒の残像

ヒカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒の残像

【Nコード】

N7167J

【作者名】

ヒカリ

【あらすじ】

ある日、坂田銀時は見知らぬ世界で目覚める。

そこは、「掃除人^{スワイパー}」と呼ばれる賞金稼ぎ達が存在する世界だった。

原作沿い。時々オリジナル話。

第零廻：物語の始まりは大概がお約束で出来ている（前書き）

はじめましての方もそうでない方もこんにちは。

今回、『銀魂』『BLACK CAT』のクロスオーバーを執筆させて頂きます、ヒカリと申します。

早速ですが、以下、注意点です。

- ・ストーリーは『黒猫』の原作沿いで進んで行きますが、基本は皆さん視点で行こうと思っっているので、完璧に原作と云う訳ではありません。カットする話も出てくると思います。
- ・なるべく小さく話を進めて行く為に、解説役としてオリジナルキャラクターが出てきます（もしかしたら数人出すかもしれませんが）。
- ・一部設定を変更させて頂く場合があります。
- ・私生活の関係で、更新は不定期となります。

それともうひとつ、ご了承頂きたいのは、『銀魂』からあまり大勢のキャラクターを出すことが出来ない、ということです。

掃除屋の性質（少人数で活動していることや、各地を旅していることなど）、私の実力などを踏まえると、出し過ぎると収集がつかなくなると思うのです。

ということ、大変申し訳ありませんが、「〇〇を出して！」というリクエストなどにはお応え出来ません。

長くなりましたが、ご理解頂けました方は次ページにお進み下さい。それでは、あなたのひとときの楽しみとなりますように。

第零廻：物語の始まりは大概がお約束で出来ている

「…………アレ？」

夢から覚醒した坂田銀時は、言葉を失った。

（確か俺、昼飯食った後居間で昼寝してたんだっただよな…………？
でもアレ？　なんでだ？）

銀時は寝起きの掠れた声で呟いた。

「なんで俺、“こんなところ”に“立って”んの？」

目覚めた”そこ”は、狭い路地裏だった。

第零廻　物語の始まりは大概がお約束で出来ている

「…………」

きよろきよろと周りを見渡す。両側は真新しい、コンクリート造りの高い壁で挟まれている。…………こんな建物、江戸にあっただろうか。

「……………」

暫くの間、ぶぶん、と壁にある換気扇が回る音だけが、路地に響いていた。

「……………、もしかして、実は銀さん夢遊病だったとか？」

じわりと湧いてきた不安を払拭するように　　実際はこれも嫌な可能性だとは思ったが　　『うん、きつとそっだ！』と無理矢理自分を納得させる。

「よし、こうなったらさっさとここ出て帰らねエとな！　依頼も来てるかも知れねエし！　帰りが遅エと駄眼鏡はうるせエし、何より糖分取りてエし！」

銀時は引きつった笑顔のまま、半ば転げるように路地裏を飛び出しました。

「……………」

銀時は再び絶句した。そこには銀時が期待した、木造の民家とコンクリートのビルが混在する江戸の街はなかった。

目の前には、真っ黒いアスファルトの地面から伸びる、超高層ビルの群。それに囲まれるように存在し、大勢の人々がスーツなどの洋装で足早に行き交う、スクランブル交差点があった。

「……………アレ？」

アレ、こんなんこないだみなかつたっけ……そうだ、昨日神楽が観てたアニメだ。確か、目が覚めたら全くの異世界に居て、そんでその世界の住人と協力して悪の帝王とドンパチやらかす話だった……ような。

(……………いやいやまさかまさか。ないないない)

銀時は慌ててこの馬鹿らしい想像を打ち消した。

いつもの彼なら、こんな非現実的なことなどそう簡単に信じることはない。しかし今、妙な胸騒ぎを感じているのは果たして昨日の酒が原因か、若しくは己の第六感が働いているのか。

「……………」

見覚えのない街。見覚えのない人々。

此处は、まるで別世界。

「……………」

銀時はその場にくりと膝を付きつなだれると、思い切り息を吸い込んだ。

「今すぐ起きろ俺エエエエ！ マジで起きてエエっ！か起きて下さい頼むからアア！！ 300円あげるからアアアア！！！！」

大声で叫びながら、近くのポールに頭を打ち付けた。それを見た通行人たちは、なるべく彼を見ないようにして避け、足早に去っていく。

三回打ったところでやっぱり痛かったので、ピタリと動きを止め、げんなりといった感じで肩を落とした。

ズキズキと額が痛む。血も滲んでいる（というより、吹き出している）。現実、なのか……？

「……ハアアア」

え？ 何ここ？ 見たこともない場所なんですけど。『目が覚めたら全く知らない場所でした』、なんて、ベタだ。ベタ過ぎる。ていうかこういうパターンって決まって面倒な事起きるフラグなんだよなア。やっぱ別世界に飛ばされ……いやないない。今のナシ！……ていうかホントここ何処？ 俺ってば迷子？ 銀さん良い歳こいて迷子ですかコノヤロー。いや、そもそもお前、コレ、迷子とかそいう言う次元？ ああそうだと良いなー、ここまでいっついてなんだけど、ただの思い違いだとイイナー。……あれ？ くそっ、前が霞んで見えねエ。

呪詛を唱えながらふらふらと立ち上がり、歩き出そうとする。すると突如、強烈な目眩に襲われた。

「ぐっ……！？」

込み上げる吐き気にたまらず膝を折り、近くの壁に寄りかかる。同時に、腹部に燃えるような激痛が走った。触れると、ぬるりとした生暖かい感触。恐る恐る視線を下げた。

（……な……、）

白い着物が、みるみる赤く染まっていくのを見た。自然と、ハハ、と自虐的な笑みが口から零れた。

「……オイオイ……冗談、だろ……」

ごぼりと口から血が溢れ出す。

世界が回る。目の前が黒に塗りつぶされて行く。

とうとう銀時はその場に崩れ落ちた。遠くで悲鳴が聞こえた気がした。

(くそ……や、ベエな、こりゃ……。つーか、銀さん、初っ端から……死亡フラグかよ。主人公、死んだら……この話……終わっちまうじゃ、ねー、か、バカヤロ……)

ふと、脳裏にふたりのこどもの顔が、浮かんで消えた。

(……、いきなり……消えたりしたら……アイツらに……ぶっ飛ばされ、る……な……)

それを最後に、銀時の意識は完全に途絶えた

……と、云う所で目が覚めた。

「……アレ？」

布団の中で目を覚ました銀時は、ひとつまばたきした。

そして、ぼんやり数秒間天井を見つめた後、腕だけを動かし、ぺたぺたと腹部や額に触れてみた。怪我が存在しない事を確認すると、漸く、肺に留めていた重たい空気を吐き出した。

「……………っあー……………、なんだ夢か……………」

なんかすぐエ縁起でもねエ夢だったなア、と頭を掻きながらのそりと身を起こした。

そして欠伸をかこうとして 固まった。

「……………アレ？ どこだここ」

目に映るのは、”見覚えのない部屋”。

首を回して見渡す。床はフローリング。自分の左側には、背の高いくローゼット、時計が鎮座する背の低い本棚、花瓶やカップなどが無造作に置かれたデスクがひとつずつ配置されており、壁には額縁に納められた小さめのポスターが掛けられている。そして今、自分が寝て（座って）いるのは、いつものせんべいのようなぺたんこの布団ではなく、ふかふかのベッドだった。綺麗に片付けられた個人の部屋と云った風だが、何故かあまり生活感がない、そんな感じの部屋であった。

「……………」

呆然とする頭に、先程の夢がちらつく。

頬を冷たい汗が伝った。

「……………あー、なんだコレも夢だな。うん。昨日呑み過ぎたしな、うん。よし、もっかい寝よう」

言いながら布団を被り直そうとした時、がちゃりと金属が触れ合う音が聴こえた。

銀時は驚いて肩を跳ね上げると、音のした方向 ベッドの正面

にある扉へと向いた。

「おー、目エ覚めたか？」

そこには、二十代前半くらいの青年が立っていた。にかりと屈託のない笑顔を向けて。

第壹廻：夢から覚めた夢を視た時ってどれが夢か現実が分からなくなるよね（前

閲覧、誠にありがとうございます。

まさかこの駄文（しかもプロローグ段階）に感想を頂くとは思いませんでした。

武士堂様、本当にありがとうございます。

……それでは、第壹話です。どうぞ。

第壱廻：夢から覚めた夢を視た時ってどれが夢か現実が分からなくなるよね

歳は二十代前半ほど。ダークブラウンのつんつん髪に金色の瞳。

細い体躯に白いシャツを纏い、その上に茶色のドーナツ状のものが付いた、青く丈の短いジャケットを羽織っている。同じく青のズボンを履いた右脚には、フォルダーに入れたりボルバーを下げている。首には鈴の付いた赤い首輪をつけており、左の鎖骨あたりに『X I I I』の入れ墨という、かなりおかしな出で立ちの青年だった。

第壱廻 夢から覚めた夢を視た時ってどれが夢か現実が分からなくなるよね

「いやー、それにしてもびっくりしたぜ。久々にこの街のアジトに寄ったらアンタが倒れてたんだからなー」

此方の反応など気にもせず、愉快そうに話し掛けてくる青年。

一方、状況が掴めずただただ呆然とする銀時。

（え？ 何？ コスプレ？ 何首輪なんか付けちゃってんのコイツ。っーかホントマジで何事コレ？ 夢なの？ 夢の続きなのコレ！?）

すっかり眠気も吹っ飛んでしまい、そろそろ頭を抱えなくなってきた。

「オイオイ、もう少し気イ使えねえのか、トレイン」

と、白いスーツに帽子を被り、右目を眼帯で隠している三十代くらいの男性が、開いたままのドアから部屋を覗き込んでいた。

「スヴェン？」

トレインと呼ばれた青年が、其方を向く。

「目覚めたばかりで見ず知らずの奴にぺらぺら喋られたら、誰だって混乱するだーろが」

呆れたように言いながら、スヴェンと呼ばれた男性は煙草に火をつけた。

「ははっそりゃそうだなっ」

「たく、お前はな……」

「ちよっと、こつち無視してそつちだけで話さないでくんない？」

やっと調子を取り戻してきた銀時が抗議すると、トレインは「悪い悪い」とかなり軽い調子で謝った。確実に悪いとは思っていないだろう。

「そついや自己紹介まだだったよな。俺はトレイン。トレインハートネット。こっちは相棒の……」

「スヴェン」ボルフイードだ。……アンタは？」

一瞬間の後に、名を訊かれているらしいことに気がついた。

「俺ア坂田銀時だ」

「サカタギントキ？ 変な名前だなー」

「オメーらも大概だろーがバカヤロー」

初対面で失礼なトレインの発言に、青筋を浮かべて睨み付ける。

「……で、今『相棒』つつってたけど、お前ら自営業かなんかやってんの？」

「ああ、俺達は掃除屋をやっつてな。コイツとコンビを組んでるんだ」

スヴェンがトレインを示しながら答えてくれたのだが、銀時は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「そうじゃ？ 何、アンタら清掃員かなんかなの？」

しばしの沈黙。トレインとスヴェンは、信じられないことを聞いたと云わんばかりの表情で、互いに顔を見合わせる。

銀時は「え？ 俺なんかマズいこと言った？」と交互に二人の顔を見比べる。

「……えーっと、サカタ？」

「あー、銀時でいいぜ。なんなら銀さんでも可」

「……じゃあ、ギントキ。アンタ、どこから来た？」

「江戸のかぶき町だけど？」

「エド？ カブキチヨウ？ どこだそこ？」

「俺達世界中旅してっけど、そんな街聞いたこともねエな」

今度は銀時が黙る番だった。

江戸を知らない？ 最早世界の中心と云えるかも知れない大都市を、知らない？

(……いやいやまさか……)

まさかあの『夢』と同じことが起きているのだとでも云うのだからか？

「……！」

銀時は慌ててベッドから飛び降り、窓に駆け寄った。

「お、おい？」

トレイン達の制止の声も聞かず、勢い良く窓を開ける。そこには、
「……………」

目の前には、小さな林。その向こうに広がるのは、ヨーロッパ調の住宅街。白い綿雲が流れる青空には、天人の飛行船はない。

……江戸の街とは、似ても似つかぬ街並み。

「……………マジでか」

ひくりと片頬を引きつらせて言う銀時を、二人は不審そうに見る。

「ギ、ギントキ？ どうした？」

「……………」

二人を完全に無視しつつ、静かに窓を締め、きびすを返す。
そして、ベッドに潜り込む。

「うん、夢だなこりゃ」

「って寝るなアアア！！」

スヴェンが物凄い勢いで、布団をひっぺがした。

「あだっ！！……………ってー、何？ 人の睡眠邪魔してそんなに楽しいですかコノヤロー」

勢い余ってベッドから転げ落ちた銀時は、後頭部をさすりながら抗議した。

「いきなり何の説明もなしに寝ようとされたら誰だってこつするだろ！」

「るせえな、耳元で叫ぶなよ。二日酔いで頭痛エんだよ。つーかそんなにカリカリしてたらその内ハゲるぞ。ある日ごっそり行くぞ。あ、もう手遅れか？ その帽子はハゲ隠しか？」

「ハゲてねエ！！ コレはファッションだファッション！！」

あくまでマイペースな銀時に律儀にツッコんでいくスヴェン。

「ハハッおもしれーヤツだなっ」

それを見て、さも愉快そうに笑うトレイン。

このやり取りは、この後暫く続いたという。

「……………で、つまりアンタはこの街……………というかこの世界の住人じゃないと？」

漸く落ち着きを取り戻したスヴェンが溜め息混じりに訊く。

銀時はかなり面倒臭がったのだが、現状把握の為に彼が無理矢理話させたのである。つまりは、銀時の住んでいた江戸のことを。

「たぶんな、たぶん。だって江戸知らねエんだろ？ 天人とかも知らねエんだろ？ そんならたぶんそうなんじゃねエの、たぶん。たぶん。いや、ていうかマジでコレ夢じゃねエの？ ねえ。マジでアンタら江戸知らねエの？ 江戸だよ、お江戸。華のお江戸だよ？ ねエ！」

「いや、どんだけ『たぶん』って言うてんだよ。だから知らねえつての」

「つか『ウチユウジン』なんてホントにいるのか？」

かなり半信半疑な様子で訊いてくる二人に、銀時は半ば投げやり
に答える。

「いるつつつてんだろ。宇宙最強一族の胃袋拡張娘とか、萌え要素はあるのに全く萌えない団地妻とか、目があっただけで人殺せそうだけど殺生嫌いな超強面花屋とか、頭に触角生えた動物好きなか皇子とか……」

「……それ、明らかに個人のことだろ……」

「なんかすげー個性的な奴らなんだな、アマントつてのは」

二人はそれぞれにそれぞれの感想を述べた。

「……兎に角。（これを信じるとして）何でこういうことになったとか、理由に心当たりはないのか？ 理由がなけりゃ、こんなト
ンデモ展開なんか起こる筈がないからな」

「……なんか今カツコ付きの言葉が見えた気がするんだけど……」

気を取り直して、記憶を辿ってみる。

（昨日は確か、久々に呑みに行ったんだっただよな……そんで閉店まで呑んで……明け方店を出て……）

そこまで考えてはた、と固まった。

「……あ」

思わず声を漏らしてしまった。

「ん？ どうした？ 何か思い出したのか？」

トレインが問い掛けて来たが、銀時はそれには応えなかった。

それは、今から数時間前のことである。

第貳廻：知らない相手に自分のことを知られてるのって物凄く気持ちが悪い（前

閲覧、誠にありがとうございます。

なんとたった3日で1200を越え、全く更新がなかったにも関わらず、6日目の今日でアクセスが1800近くに！

本当に感謝感激です。

ていうか更新遅くてすみません。

でも代わりに今回は長めです。

それにしても、二次創作はやはり難しいですね……。

今回は特に、（書くに当たって）私がキャラを掴めていないのが丸分かりかと思えます。

今回コメントを下さった東方の使者様、本当にありがとうございますました。

励みになります。

……それでは第貳廻、どうぞ。

第貳廻：知らない相手に自分のことを知られてるのって物凄く気持ちが悪い

「あー……やべ、呑み過ぎたなチクショー」

その日、銀時はまだ暗い明け方の帰路をひとり歩いていた。

第貳廻 知らない相手に自分のことを知られてるのって物凄く気持ちが悪い

「例に漏れず二日酔い決定だなこりゃ……うぶっ……」

あまりの気分の悪さに道端にかがみ込み、胃の中の物を溝に吐き出した。そして少しだけ軽くなった胃をさすりながら、本日十数度目の呻きをあげる。

「……………あゝ……………クソ、もう呑まねエ……………俺アもう酒なんか呑まねエぞ……………」

調子に乗って呑み続けた自分を呪いつつ、再び帰路につこうと重い腰を上げた時だった。ふわりと心地良い夜風が頬を掠めた。

「……」

異臭が、した。

それは、普段の生活ではめったに嗅ぐことはない、しかし彼にとつてはその昔に嗅ぎ馴れてしまった、錆びた鉄のような臭い

(これア……)

血の臭い、だ。それも、とんでもない量の。

銀時は、さつと臭いの元を捜した。風向きからして、どうやら数歩先の路地裏から漂って来ているらしい。

耳を澄ますと、微かに草履が地面を擦る音が風に乗って聴こえてきた。しかも、

(……近付いて来てやがる)

飛び込もうかと考えたが、いきなり暗がりに入って夜目がきかなければ意味がない。仕方なく、街灯で出来る自身の影に注意を払いながら、電柱の陰に身を隠した。そして腰の木刀 『洞爺湖』に右手をつかえ、いつでも飛び出せるように体制を整えた。

この数秒の間に 未だに胸焼けはするが すっかり酔いは醒めてしまっていた。

ぞり……ぞり……ぞり。

足音はゆっくりと此方に歩いて来る。

銀時は息を殺して、足音の主が出て来るのを待った。

ぞり……ぞり……ぞり……。

ぽた……ぽた……ぽた……。

足音に混じって水音も聴こえ出した。
もう少しで路地から出て来る。

ざり……ざり……ぞ……。

ふと、音が、止んだ。

気付かれたか。

思うが早いか、銀時は電柱の影から飛び出した。

「……………？」

しかしそこには誰も居らず、何もなかった。いくら暗いといっても路地の向こう側もある程度の明るさがあるため、そこに何かがあるかどうかくらいなら分かる。だから、隠れられるような場所もない。水音の音源も、ない。

「……………」

銀時の顔から、さあっと血の気が引いた。

(ま、まままさか幽……スタンド……)

ぼたり。

「!!」

銀時は飛び上がらんばかりに驚いた。

先程の水音が、すぐ足元で聴こえたのだ。そして、

「!!」

くいと着物の袂が引かれた。叫びだしたい衝動を辛うじて堪え、
代わりにからからに渴いた喉を鳴らした。

(お……おお落ち着け落ち着け！ まままだ幽れ……ス、スタン
ドと決まった訳じゃねエ!! こ、コレはどっかの迷子の子犬がじ
やれついでるだけかも知れない……!!)

なんとか無理矢理に自分を納得させた銀時は、意を決したように、
汗ばむ手で木刀を握り直した。そして、恐る恐る後ろを振り返った。

街灯が、足元の“それ”を照らしていた。

「……!!」

己の着物の袂を握り締める子供が、此方を見上げていた。 血
にまみれた、狐の面を付けて。

「……みいつうけたああ」

にい、と細められたその目を見た瞬間、ざわりと肌が粟立つのを
感じた。

カカワツテハイケナイ……ニゲロ

己の本能が警笛を鳴らす。今感じるのは先程までの”恐怖”とはまた違う、別の感情。

袂を握った小さな手を振り払い、素速く一步後退したのだが、何かにぶつかり、尻餅をついた。

「……ツ痛エ〜……」

「『いつてエ〜』。くすくす……」「くすくす……」

「!?!」

いつの間にか、同じ狐の面を被った”子供たち”が、自分を見下ろしていたのだ。

「くすくす」「くすくす。みつけた、みつけた。“しろやしや”のおにいちゃん」「みつけたあ、みつけたあ、くすくす……」「……くすくす……」

面をつけている為にくぐもった、あどけない幼子の声が辺りに響く。

(……! コイツら……)

同時に漂う、噎せ返るような血の臭いと殺気。彼らから感じるのは 狂気。

「……………何ですかアお前ら？ いい子はまだ寝てる時間ですよ。まア『お兄ちゃん』って言うてくれたのは褒めるけどさア。つーかなんで君たちそんな名前知ってんの？」

子供たちを見据えたままゆっくりと立ち上がり、木刀を構え直す。

くすくす……………くすくす……………

子供たちはそんな彼を嘲笑うかのように愉しそうに手を繋ぎ、銀時の周りをくるくると踊る。

……………かあごめかごめ

(……………！)

子供たちが歌い始めた途端、ぴしりと身体が動かなくなった。

(…！ 声も出ねエ……………。クソっコイツら何しやがった！？)

かーこのなーかのとーりいは

いーつういーつうでーやある

直感で分かる。

この唄を最後まで聴いてはいけない。

よーあーけーのーばーんーに

銀時が必死にもがく中、子供たちの唄は続く。そして……、

つーるとかーめがすーべった

子供たちが一斉に、ぴたりと脚を止め

うしろのしょうめんだあれ……

瞬間、銀時の意識はぶつりと途絶えた。

「あのキツネのガキ共……！」

銀時は行き着いた答えを、知らず知らずのうちに声に出していた。

「その通り」

「!!」「っ!」「!?!」

不意に、聞き覚えのない声が部屋に落ちた。

「こんにちは」

いつから居たのだろう。開きっぱなしのドアの向こうに、”少年”が立っていた。

見た目、十代後半に差し掛かった頃。灰色に近いボサボサの銀髪に漆黒の瞳を持つ。端正な顔には、微笑を浮かべている。白いワイシャツと黒のスラックス、その上に、床を擦りそうな程に長い黒のロングコートを羽織っている。

「なんだお前……人ン家勝手に上がり込んでくるなんて、礼儀がなっていないんじゃないか？」

スヴェンが警戒しながら声をかけ、トレインはちらりと右腿のホルスターに視線をやる。

銀時も目だけで己の愛刀を探し、ベッドの脇に立て掛けられているのを確認した。

少年は警戒する彼らに対し、申し訳無さそうに頭を下げる。

「すみません、何度も呼び鈴を鳴らしたんですけれど、気が付いてらっしやらなかったようなので……」

「あ、そっぴや随分前から壊れてたな」

半分毒気を抜かれたように、トレインが暢気な声を上げた。

「かといって勝手に入ってくるのはマズいだろーが。不法侵入でしよっぴかれても文句言えねーぞ」

銀時が小指で耳をほじくりながら言う。

「はは、ですよね」

少年はまたすみません、と謝る。

「僕としても気が引けたんですけれど、急用だったもので」

「俺たちはお前に面識なんかねえんだけどな」

スヴェンは依然厳しい面持ちで少年を睨み付ける。

「それでもとても大事な用があるんですよ 元IBI捜査官、
スヴェンIIボルフィードさん」

「「!?」「」「? アイビー?」

トレインとスヴェンが驚いたように目を見開き、なんのことが分からない銀時は疑問符を浮かべた。

「……………なんで知ってやがる」

一変して表情が険しくなったトレインに、少年が苦笑する。

「そんなに警戒しないで下さい。元『時の番人』の“X I I I I”、
トレイン”ハートネットさん”」

「……………！」

「すみません、僕も勝手に他人の過去を掘り返すのは好きじゃないんですけれど……………此方も仕事なんですよ」

「……………仕事だと？」

今度はスヴェンが訊き返した。

「ええ。今日は主に此方の坂田銀時さんに用がぁあります」

「へ？ 俺？」

殆ど蚊帳の外状態だった銀時が間抜けな声を出す。

「ええ。貴方のことも少し調べさせて頂きました」

ぴくりと反応した銀時に構わず、少年は記憶を辿るように軽く目

を閉じた。

「坂田銀時。10月10日生まれ。身長177cm、65kg。好きな物は甘味。大の甘党で、現在糖尿病寸前の予備軍……」

いきなり銀時のプロフィールから始まったので、三人はしばらく呆気にとられていた。

しかしある言葉で、再び空気が凍った。

「約十年前、攘夷志士、現穏健派『狂乱の貴公子』こと桂小太郎、同じく攘夷志士が過激派、武装集団『鬼兵隊』を率い、また、攘夷浪士中最も過激で危険とも称される高杉晋助、星間貿易業『快援隊』が頭、坂本辰馬らと共に後期の攘夷戦争に参加。終戦後は攘夷活動から退き、江戸はかぶき町にて『万事屋銀ちゃん』を経営。現在の従業員は剣術道場恒道館現当主、志村新八、『夜兎族』の一人、神楽の二名。また、ペットとして狛神の定春。尚、ここに記している以前の記録は不明である」

トレインとスヴェンは横目で銀時を見た。

銀時はすらすらと自分の経歴を述べる少年を、黙って見据えていた。しかし、その顔がみるみる険しくなっていくのが見てわかった。

「備考、攘夷戦争時代の通り名は『白』」

ガッン！！

刹那の出来事。

少年の顔の真横の壁に、木刀が突き刺さっていた。

「……………」『少し』つつつた割に随分とまア詳しく調べてんじやねーか、なアオイ……………」

しんと静まる部屋に、押し殺した低い声が響く。銀時は木刀を投げ放った形のままの右腕をゆっくりと下ろし、ベッドから立ち上がった。

「俺ア知らねエ奴に昔のこと語られんのは嫌いなんだよ」

トレインとスヴェンは顔にこそ出さなかったが、驚いていた。先程までのふらふらした体ではない、まるで研ぎ澄まされた刃のように鋭い殺気を放つ銀時に、だ。

「すみません、挑発するような発言をしました」

少年は笑みを絶やさぬままだが、心底申し訳無さそうに頭を下げた。

「……………」で、用事ってなんだ」

ふいにいつもの面倒くさそうな声に戻った銀時が、頭を掻きながら、それこそ面倒くさそうに訊いた。

「はい、此方に伺ったのは、坂田さん、貴方に頼み事があるので
す」

そして何事もなかったかのように、少年は話を進めた。

「頼み事？」

「ええ。僕は『万事屋銀ちゃん』に依頼をしに来たんです」

第参廻：腹黒い奴程常に笑顔（前書き）

お久しぶりです、ヒカリです。
閲覧誠にありがとうございます。

リアル多忙により、なかなか投稿出来ずにひと月も放置……。
それでも覗きに来て下さる方が沢山いらっしやったことにとても嬉しく、とても感謝しております。

本当は昨日投稿予定だったのですが、ミスで文章の三分の二を消去してしまふという、涙モノの事件が発生してしまふ……。
幸い、ある程度内容は覚えていたので、なんとか今日、更新にこぎつけました。

さて今回感想を下さった次郎さま、誠にありがとうございます。
そうそう、毎回感想を下さった方のお名前をこちら（前書き）で書かせて頂いておりますが、もし名前を載せて欲しくないと言う方はコメントと共に明記して下さいね。
表記があれば書きませんので。

それと、この話でプロローグの話はおしまいです。

『短縮する為にオリキャラ入れたって言った割に全く短くなってねーじゃん！』と思った読者さま、誠にその通りで御座います。
自分でもぶっちゃけコイツ要らなかつたんじゃないかね？と思つ（げぶんげぶん

……と、いうことで（？）次話で原作に入っていきます。
何処から入るのかは、まだ秘密です。

それでは、第参廻どうぞ。

第参廻：腹黒い奴程常に笑顔

「万事屋に依頼……？」

銀時の鸚鵡返しに、少年は頷いた。

「ええ。申し遅れました、僕はフィルといいます。お見知り置きを」

少年 フィルは恭しく礼をした。

第参廻 腹黒い奴程常に笑顔

「さて、何かからお話ししましょうか」

フィルは顎に指を当てながら、軽く唸った。

あれから銀時たちはリビングに通されており、ガラスのローテーブルを囲うように置かれたソファに 銀時の正面にフィル、右側のソファにスヴェン、左にトレインという風に 座っていた。

「……お前は何者だ。何で俺たちのことを知っていた？」

灰皿で煙草をもみ消したスヴェンが、口火を切った。

「僕は今……言うなれば、異世界間で警察の真似事をしています」
「今ひとつ分からんのだが」

スヴェンは眉を寄せ、あとの二人も顔を見合わせて首を傾げた。

「例えば、異世界の技術を使った犯罪の防止や、坂田さんのように異世界に飛ばされてしまった方を元の世界に帰したり、ですかね。因みに、僕らはこのような方々を“異邦人”^{エトランジェ}と呼んでいます」

「……どっかの魔法少女みたいなことしてんのか」

銀時はソファにだらりと身を沈めながら訊いた。

「ええまあ。僕らの場合はある組織が関与している場合のみなんですけどね」

「ある組織？」

「……それは追々話していきます」

フィルはほんの一瞬迷うような素振りを見せた後、それだけ言った。銀時は少しだけ眉を顰めた。

「じゃあ次だ。お前とギントキが違う世界から来たって証拠は？」

スヴェンは新しい煙草をくわえ、ジッポーを取り出す。
銀時は『まだ信じてなかったのかよ』と、スヴェンをねめつけた。
一方のフィルはううんと難しそうに首を捻ったあと、徐に右手を
顔の前に挙げ、人差し指と中指を立てた。

「そうですね……現段階では、これ位しか出来ません」

三人は不審に思い、問い質そうと口を開いた瞬間、フィルの指が
ついとスヴェンの顔に向いた。

「『業火、灯穂』」

刹那、ぼうと空気と物質が燃える音と共に、スヴェンの ” まだ
火のない煙草に ” 小さな炎が灯った。

「あ?」「うお!?!」「おお!?!」

三人、特に当のスヴェンはかなり驚き、口から煙草を放してしま
った。

「『廻風、気流』」

しかし、再びフィルが言葉を紡ぐと、落ち掛けた煙草の真下から
小さな風が起こり、煙草を上へと吹き上げた。煙草が再び重力に従
おうとする直前に我に返ったスヴェンは、慌ててそれを摘む。

「……………」

皆暫し無言で、スヴェンの指の間にある煙草を見つめていたが、誰ともなしにフィルに視線を移した。すると彼は、にこりと良い笑顔を向けてきた。

「先程申した通り、現段階ではこれくらいしかお見せ出来ませんが……信じて頂けますか？」

軽く首を傾いでそんなことを言う。

トレインとスヴェンは『道』^{タウ}という力である可能性も考えたが、取り敢えず頷いておくことにした。フィルは「良かった」と、再び微笑んだ。

「では、此処までで他に質問などは有りますか？」

「さつき『僕ら』って言うってたよな。ってことは仲間がいるのか？」

今度はトレインが質問を投げた。

「ええ。『協力者』と言ってしまえばもっと居ますが、直接動くのは僕を含めた五名です」

「意外と少なエんだな」

「はい。人員不足でかなり大変です」

質問は終わりらしく、トレインは其処で黙った。

「宜しいですか？ ……では、話を進めますね」

言っとフィルは、右腕に巻いている腕時計に似た小型の機械を操作し出した。すると、中空に幾つか画面が浮かび上がる。先程ほどではないにしろ驚いている三人を余所に、フィルは銀時に問い掛ける。

「坂田さんは狐のお面を付けた子供たちに出っただけですか？」

銀時は無言で肯定した。

フィルが画面の一つを指で突くと、映像が切り替わった。

「それはこんな子たちではなかったですか？」

そこには、つい数時間前に見た童子たちが数人映っていた。

「あ！ コイツら……」

銀時が声をあげ、あとの二人も身を乗り出して画面を覗き込んだ。トレインはうげっと声を漏らしながら、心底不快そうに顔を歪めた。

「なんだコイツら気持ち悪い」

「彼らは『式』です」

「『しき？』」

「一般的には『式神』とも呼ばれる、所謂 ” 使い魔 ” です。

……坂田さんならお分かりではないですか？」

「あー、まアな」

銀時は以前、陰陽師たちのいざこざに巻き込まれ、式神と呼ばれる存在と関わったことがあった。しかしこれはまた、別の話である。

「因みにこの子たちは狐の神様の使いですね」

「神様、ねエ……」

トレインは胡散臭げに呟いた。

「ああ、『神様』って言うのは、その中で特に秀でた力を持った人ならざるモノ” のことを差します。この子たちはそれに限りなく近い存在で、使役する側も相当な実力がないと逆に襲われてしまいます」

「こんな子供がか……？」

スヴェンは煙を吐き出した。

「彼らは子供の姿をとっているだけであって、人間ではありません。相手にする際は殺す気でいかないと、確実に此方が殺られます」

スヴェンはあまり納得がいかないようで、眉間に深い皺を刻んだ。自称紳士の彼としては、子供に手を出すのは抵抗があるのかも知れない、とトレインは思った。

「話を戻します。坂田さんの世界において、この妖狐たちを使役出来るのは一人しかいません」

ファイルは懐から一枚の写真を取り出し、テーブルの上に置いた。それには、黒の短髪に、金フレームの丸メガネを掛け、鶯色の羽織を纏った二十代後半程の男性が写っていた。

「しげおかのあきひと重岳野昭人。呪術師、重岳野一族の生き残りです」

「呪術師って……陰陽師のことか？」

銀時は写真を取り上げた。

「いえ、根本的には違います。陰陽師は五行術を主に扱いますが、呪術師は呪術が中心なんです」

「……全つ然分らん」「」

「えーっとですね、五行は木火土金水……五つの自然界の力を借りる術で、呪術は名の通り人を呪う術ですね」

と言っても他にも色々とありますけれど、とも付け加えた。

「ふーん」

銀時は欠伸をかみ殺しながら言った。恐らくあまり理解はしていないだろう。

「……では、続けます。その昔、呪術師は陰陽師と共に幕府のお抱え集団として、占いや暗殺などで活躍していました。特にその中で重岳野はかなりの名門で、受けた依頼は必ず成功させていました。ですが、」

呪術は素人でも比較的簡単に行うことは出来るのだが、何分そのリスクが高い。失敗すれば、高確率で命を落としてしまう程にだ。そして更に重岳野の術の場合、陰陽道以上に生まれ持った才能が不可欠であり、才がない者は初級の術でさえ満足に扱えなかったのである。

「リスクを負って呪術を行うよりも、幾らか安全な陰陽道を選ぶ者が増え、呪術師人口は急激に減少。重岳野も代を重ねる毎に術者となれる子が減り、そしてとうとう、数代に一人産まれれば良いという状況にまで落ち込んでしまいました。……すると、どうなると思います？」

フィルは謎掛けでもするように、順に三人の顔を見渡した。

「毎日のようにあった依頼は徐々に減って行き、遂に一族は世界から忘れ去られてしまいました」

よくある話だと、銀時はこっそりと嘆息した。利用価値があるものはとことん利用され、価値がなくなれば簡単に切り捨てられる。何時の時代だろうと、それは変わらないのだ。

「散々持て囃され、時には命を懸けて幕府を守って来た。その拳

げ句のこの仕打ちに重岳野の一族は怒り、幕府を恨むようになりました」

銀時は露骨に嫌そうな顔をした。

「まさか俺、そいつらの復讐劇に巻き込まれたってんじゃないかな」

「全くもってその通りです」

間髪入れない肯定だった。

「マジかアア！ ちょ、ふざけんなよオオ！？ つか何で俺エ！？ 俺何かしたア！？」

銀時は頭を抱えてシャウトした。

「ぎ、ギントキ落ち着け！」

「その辺りの理由はまだ不明です。ただ現時点で分かるのは、坂田さんがこの世界へ飛ばされた術が重岳野の呪術であること、坂田さんが元の世界へと帰るには、同じ術でなければならぬこと」

「マジかー！！」

「そして、重岳野昭人が鬼兵隊と手を組んだことです」

瞬間、銀時は動きを止めた。

何となく、フィルが何を言いた

いのか分かった。

「彼は江戸……いえ、世界の全てを焼くつもりです」

銀時は目を細めてフィルを見据えた。暫しの間、部屋を静寂が満たした。

「……ったくよー」

今まで黙って話を聞いていたトレインが、徐に口を開く。

「そんなことで世界ぶっ壊そうなんて、巻き込まれた方はたまつたもんじゃねーよな」

トレインは溜め息をつきながらソファの背もたれに体を預けた。

「……そうですね。でも」

フィルはトレインに微笑みかけた。

「彼らには呪術師としての誇りが、何よりも大切だったんだと思います」

その瞳は何処か悲しみを帯びているように、銀時は感じた。しかしそれも一瞬のことで、銀時に向き直ると再び話し始める。

「彼は目的の為に、この世界の技術を利用するつもりです。理由はどうあれど、それを許す訳にはいきません」

フィルは姿勢を正し、銀時を真っ直ぐに見据えた。

「そこで、万事屋さんに依頼です。重岳野を止める為、力を貸して下さい」

ぺこりと深く頭を垂れた。

「……つってもどうしろっつーんだよ。俺にそのしげのはらを倒せと？ 俺アそんなのゴメンだぞ」

「『しげたけの重岳野』です、坂田さん。いえ、貴方には帰還方法が分かるまでの間、この世界で自由に行動して貰い、何かそれらしい情報があれば報告して頂ければ充分です。あ、勿論、報酬は弾みますよ」

瞬間、銀時の耳がぴくりと反応した。

「そーですねー……」

フィルは懐から電卓を取り出し、軽快にキーを叩くと画面を銀時の目の前に差し出した。

「取り敢えず、契約金としてですが」

ゼロの数を数えてみた。

(いち、こー、さん、しー、ごー、……)

「成功報酬はこの五倍で」

「おっしやア銀さん江戸の為に一肌脱ぐぜ!」

銀時はソファから勢いよく立ち上がり、フィルの手を握り締めた。

「金に釣られてんじゃねーかオイイ!」

トレインとスヴェンはシンクロツッコミを繰り出した。

「それで、お二人にもご協力願いたいのですが」

唐突にフィルはトレインとスヴェンに話し掛ける。

「いきなりだな。つーかそんなのお前やお前の仲間がやりやいいじゃねーか」

スヴェンは不機嫌そうに煙草をもみ消した。

「そうしたいのは山々なんですけど、仲間は別の任務で連絡が取れない状況なんです。でも僕一人で坂田さんの世界とこちらで平行して調査を行うのはかなり無理がありますし……。お願い出来ませんか? ご協力下さった場合、勿論お二人にも報酬を出します。経費込みで……。この額でいかがでしょうか?」

再び電卓を操作し、今度はトレインとスヴェンに見せる。

「よっしゃ協力するぜ! ギントキ」「困った時はお互い様だ!

「!」
「おう、頼むぜ!」

万年金欠男三人は瞳を輝かせ、がちりと固く手を組んだ。その様子を、背後にどす黒い影を背負った少年がにこやかに見つめていたのだった。

第四廻：大体どこの主人公も過去は暗くて特殊（前書き）

閲覧誠にありがとうございます。

お久しぶりなヒカリです。

やっと本編突入！

けれどもかなり半端なところから入りました。

言い訳は、今回から書くことにしました、あとがきにて。

今回、視点や場面がころころ変わります。

そしてトレインの過去について、多少触れております。『BLACK CAT』を読んでいない方の為の配慮のつもりなのですが……
どうでしょうか。

そして話数について。漢数字の「し」が変換出来なかったので、通常の「四」になっております。

……それだけです。はい。

本編、少々捏造入っているかも知れませんが、ご注意を。
では第四廻です、どうぞ。

第四廻：大体どこの主人公も過去は暗くて特殊

黒き猫よ……

自由な意志を持つ権利などお前には存在しない

お前は我らクロノスの飼い猫に過ぎぬのだから

……

第四廻 大体どこの主人公も過去は暗くて特殊

「……………トレイン……………トレイン！」

窓から射し込む暖かな日差しに微睡んでいたトレインは、不意に掛けられた声によって現実へと引き戻された。

「……………んあ？」

左に首を回すと、自身の相棒、スヴェンが不機嫌そうに此方を見下ろしていた。

「んあ、じゃねエよ。ちゃんと見張つとけって言っただろっが」

「だってスヴェンもギントキもトイレ長ーんだもんよう。便秘？」

「ヘアスタイルを直してたんだよ！」

「いつもボーシ被ってるクセに……」

トレインは子供のように口を尖らせ文句を垂れると、「んで、ギントキは？」と、新しい相棒の姿を探した。

「ああ、アイツは……つと、出て来たな」

スヴェンの視線を追うと、やたらと目立つしろい男が、トイレから出て来たところだった。

坂田銀時。それが彼の名だ。

彼はトレインより幾らか年上なだけなのだが、その銀に近い白髪の色で、実年齢よりも少々老けて見える。初めて見た時は、よっぽど苦労したのかとも思ったが、聞くところによると天然パーマも含めて生まれつきらしい。彼の髪型をからかった時かなりの剣幕で怒っていたので、これ（天然パーマ）はどうやら彼のコンプレックスのようだ。

次に、彼の服装。詰襟に似た黒い半袖とズボンにブーツ。その上から流水模様の白い着流し（と云うらしい）に左腕だけを通して腰を帯で留め、緩く締めたベルトに『洞爺湖』と彫られた木の剣を差している。

この格好はこの街　と云うよりは、この世界と云うべきだがでは、かなり目立つ。

そして彼の最大の特徴と云えるかも知れない、死んだ魚のようなまるで覇気のないあの目。 ”ダメな大人” 感がありありと見て

取れるあの目は、本人曰わく『いざという時煌めく』らしいのだが、
実際どうなのだろう。

そうこう考えている間に、銀時はトレインたちのテーブルに到達
した。

「あゝ出た出た。ひっさびさに巨大バナナが大漁だったぜ」

「お前……飲食店でそういうことを口にするな」

如何なる場所でも言うべきではないと思う。

「何だ、便秘はギントキの方が？」

にやりと口角を上げてやると、銀時は気だるげに片眉を上げて反
論した。

「違エよ。この二、三日連続で急に良いモン食ってるから便通が
良くなっただけだって」

「……ファミレスのハンバーグとステーキで？」

「オメー、一体どんな食生活送ってたんだよ」

銀時がこの世界に飛ばされてから、今日で四日目。

『この世界で行動するなら免許（掃除屋となるには掃除屋免許
が必要）がある方が便利だ』と言うフィルの助言で、説明を受けた

次の日の朝一番に手続きを済ませ、試験に挑んだのであった。初め銀時は「試験」と聞いてかなり渋っていたのだが、実際受けてみると何ということはなく、曰わく『運転免許より楽勝』だったらしい。それもその筈、掃除屋試験は何よりも実力が重視。嘗て「白夜叉」と畏れられた銀時だ、何も問題はなかった。そして今日が、免許習得から三日にしての初仕事なのだ。

「だって仕事は来ねーわ大食い娘はいるわ巨大犬はいるわで肉買う余裕なんてなかったんだよ。……あ、お姉さん。毎パフェ追加ー」

「まだ食うのかよ！ …… ったく、どいつもコイツも…… っつと、そうだ。トレイン。そんな暢気に構えてていいのか？ 奴を取り逃がしたらどうするつもりだ。大体、アイツを捕まえようとぬかしたのはテメーだぜ」

スヴェンは尚も不満そうに溜め息をつき、トレインをねめつける。

「わかってるって」

しかしトレインはけらけらと笑って流し、ちらりと視線をずらす。その先では、眼鏡を掛けた男性が食事をしていた。

「パド・リード、伝説の食い逃げ犯。名を変え顔を変え、現在までにおよそ二千を超える飲食店で犯行を重ねている。『俺に食い逃げ出来ない店はない』がモットー」

男性　パドの席には、既に綺麗にたいらげられた皿が大量に重ねられており、彼の経歴を知らぬ者でも、本当に代金を支払う気が

あるのかと少々疑問に思うことだろう。

スヴェンはあれだけの料理がああ体のどこに入るのだろうと、呆れを通り越して感心した。銀時からすると、身近にそれ以上の大食らいがいるので、そこまで驚くような量でもなかったが。

「顔変えてまで食い逃げするなんざよっぱどのバカだなアイツ。つーか整形代の方が金掛かるんじゃないかねエの？」

「全くだな」

言いながら銀時はトレインの隣に、スヴェンは向かいに腰掛ける。

「オイ、トレイン。フィルから契約金はたんまり貰ってるんだ。ギントキの練習とはいえ、こんな三日分のメシ代にもならねエ上に現行犯で捕らえねエといけねエ面倒な小者、わざわざ選ばなくてもいいだろうが」

と、次々と不満をぶつけてきた。

「まあまあ。奴は逃げ足に自信があるらしくて一度も捕まったことがねエんだ。そういう奴のハナツぱしらをへし折ってやるのも楽しいじゃんか」

「オメーもホント物好きだよなア」

銀時が店員からパフェを受け取りながら言った。

「まア見てなって」

トレインは歯を見せて笑った。

「……はい。目撃情報は本物でした。既に確認済みです」

その頃、街の公衆電話で通話する男性がいた。

「……分かっています。使命は必ず果たします。全ては……我らが『クロノス』の輝ける未来の為に」

男性は静かに受話器を戻すと、手元の写真に目を落とした。

「……探しましたよ。ブラックキャット黒猫」

最後の料理を胃袋に収めたパドは、ナプキンで丁寧に口を拭いた。その横に、顔をひきつらせた店員が伝票を持って立った。

「あのお客様。今ので合計十萬イエンを超えてしまいましたが、代金の方は……」

「金は、ねえ!?!」

パドは眼鏡の奥の眼を光らせ、

「は？ ぶフウ!!」

思い切り店員を突き飛ばすと、正に脱兎の如き速さで店を出た。

「……く、食い逃げだア~~~~っ!!」

「動いた！ スヴェン支払い頼む！」

「俺の分もよろしく!!」

言うが早いか、トレインと銀時はパドを追って店を飛び出した。それに慌てたのはスヴェンだ。

「何イ!? ちょっと……おいトレイン、ギントキツ！ 俺は元々メシ食う気はなかったから小銭しか持って来てねエンだぞ!!」

言い切った瞬間、周囲からの冷めた視線に気が付いた。

(……!!)

一瞬の逡巡。

「また食い逃げだーッ!!」

スヴェンは、パド及び相棒たちを追った。

一方、トレインと銀時。

「待ちやーがれーっ！俺から逃げようなんざ百万光年（？）早エーぜー！」

意味が分からない。

「……なア、トレイン。もう面倒臭エーからこれ投げて捕まえていい？」

早くも鬼ごっこに飽きてしまった銀時は、そう言っつて木刀を提示したのだが。

「えー、だつてつまんねエじゃんよー。やっぱり足自慢には足で勝負しねエとさー！」

これには流石の銀時も呆れた。

「オメーなア……」

「トレイン、ギントキー！」

二人が振り返ると、スヴェンが追いついて来ていた。

「ありゃスヴェンちゃん、早いな」

「テメーらのせいで俺まで食い逃げ犯になつちまつたじゃねーか！」

「えっ、何々、スヴェン食い逃げしたの？」

銀時がからかうように言っていると、スヴェンは青筋を浮かべて叫んだ。

「メシ食ったのはテメーらなんだぞっ！！」

「まあいいじゃねーか。野郎をとっ捕まえりゃ店の連中も許してくれるよ、きつと」

「そのお気楽思考何とかしろっ！！」

スヴェンはトレインを怒鳴りつけた。

「……はっ、はっ、」

パドは角を曲がり、路地へと逃げ込んだ。

パドが無銭飲食を働く理由。通常食の食い逃げ犯なら、大体の動機は金絡みだろう。しかし、パドは違った。

自分に逃げられた時のあの、店員たちの顔。べそをかき、顔をくしゃくしゃに歪め、うなだれる姿。あれほど可笑しいものなどない。そう。彼は”それ”を見る為に無銭飲食を重ねているのだ。あんなに面白いものを見られて、しかも腹一杯になるなんて、最高ではないか。これは彼にとって、顔を変えてまで行う価値があることだと言えた。

これが、彼の生きがいとも言えた。

それもこれも、この足のお陰だ。本気の自分には、誰もかなわない。そう自負していたし、何より結果が示していた。しかし。

「……しつこい奴らだな……はっ、はっ、」

今回の追跡者は異常だ。

もうかれこれ十分は走り続けている。少なくとも自分は、全速力で。なのに相手は息を乱すでもなく、一定の速度で自分を追い続けているのだ。

息が苦しい。自慢の足も、もつれてきた。

このままだと、確実に追い付かれる。

せめて、どこか逃げ込める場所はないかと思った時、

「!？」

道の向こうに、誰かがいた。追跡者たちの仲間かと思い、慌ててブレーキを掛けた瞬間。

ドス、という鈍い音を立て、パドの胸にナイフが突き立てられた。

「!？」 「!？」 「!？」

三人は足を止めた。

倒れたパドを気にも留めず、男性は此方に声を掛けて来た。

「……こんな小者相手に、何を遊んでおられるのですか？ トレインさん……」

男性を見たトレインは、目を見張った。

「……クレヴァー」

「……知り合いか？」

僅かに表情を険しくした銀時は、クレヴァーから視線を外さずに問い掛けた。

「ああ……。飼い猫時代の……後輩みたいなもんかな」

(！……じゃあ『秘密結社』の……)

スヴェンは目を細め、クレヴァーへの警戒を強めた。

「……スヴェン、ギントキ。悪くけど少し外してくれるか？」

二人が横目で伺うと、トレインは微笑を浮かべていた。

その笑みは、僅かな拒絶を含んでいた。

これはおれの領域だ。関わるな。と。

「……仕方ねエか。俺たちはアイツを病院に連れてくぜ。……まだ助かる見込みはある筈だ」

それを見て取ったスヴェンは溜め息ひとつ、了承した。トレインは「頼む」とだけ言うと、クレヴァーを見据えたまま、黙り込む。

銀時は無言でパドを担ぐと、スヴェンと共に病院へと向かった。トレインはそれを見届けると、クレヴァーを引き連れ、その場を去った。

一時間後、病院。

銀時が待合室の椅子に座って待っていると、医師の説明を受けに行っていたスヴェンが戻って来た。

「今手術中だ。呼吸器が傷付けられててな……少しばかり難しい
そうだな」

スヴェンはどかりと銀時の隣に腰を下ろした。

「……そうかい」

銀時はスヴェンを見ずに言うと、後頭部に手をやり、背もたれに深く背をもたせ掛けた。

「つたく、とんだ初仕事になっちまったな」

銀時の悪態にスヴェンは苦笑した。

そうして暫く、二人共に黙って人々が目の前を行き交う様を見ていたが、銀時はふと先程のことを思い出して口を開いた。

「トレインの奴『飼い猫時代』とか言ってたけど、何のこと？」

スヴェンは暫く疑問符を浮かべていたが、やがて、ああ、と声を漏らした。

「そういえば言っていなかったな」

本当ならもつと早い内に話す予定だったのだが、フィルから今後の指示を受けたり、銀時の掃除屋試験などで機会を逃し、すっかり忘れていたのだ。

「本人はいねエが……まあいいだろ。……アイツ……トレインはな、二年前まで『クロノス』と呼ばれる組織で抹殺人^{イレイサー}をしてたんだ」

「黒の巣？ そりやまたあからさまな名前だなア」

「クロノスだクロノス！ 妙な変換すんな！！」

周囲からの奇異の眼差しに気が付いたスヴェンは咳払いを一つ、話を戻した。

「クロノスには直属の戦闘集団、『時の番人』^{クロノ・ナンバーズ}ってのがあり、トレインはその十三番目^{サーティーン}だった」

銀時は眉を顰めた。何となく、事情が飲み込めた。

「トレインは上から命令されるままに、数多の要人を暗殺してきた。どんな奴でも、確実に。そしていつからかこう呼ばれ、恐れられるようになった。不吉を届ける『黒猫』^{ブラックキャット}……ってな」

「……………アイツ……クレヴァーっていったか？ ……大方、トレインを連れ戻しに来たってところか」

「まあ、そうだろうな」

銀時はスヴェンに気付かれないように、ゆっくりと溜め息をついた。

黒猫　。

何となく、トレインが置かれていた状況が理解出来た。

それは、銀時だからこそ。

『白夜又アアア！！』

この世界のことは、余り知らない。

しかし自然と、昔の自分と重なった。

初めて彼に出逢った時にも、どこか心の奥深くで気が付いていた。

確かに彼は、自分と似ているのだ。

そう思うと、自然に言葉が漏れた。

「彼奴も、苦労したんだなあ」

銀時の消え入りそうな程に小さな呟きを聞き取ったスヴェンは、初め、不思議そうに首を傾げていたが、彼のどこか遠くを眺めるような深い瞳に、何かを感じ取った。

「ギントキ……まさかお前……」

「ボルフィードさん、スヴェン」ボルフィードさんはいらっしや

いますか？」

自分を呼ぶ声にスヴェンは慌てて立ち上がり、看護師の元へ、足早に向かった。

残された銀時は、静かに目を瞑った。

日が地平線へと沈もうとする頃。左頬に絆創膏を貼ったトレインは、街を歩いていていた。

「よオ。……あいつはどうした？」

目の前に、彼の相棒たちがいた。

「……行つたよ」

トレインはそれだけ言った。

スヴェンは煙草の煙を吐き出すと、「そうかい」とだけ返した。銀時はそのやり取りを黙って見ていた。

「じゃ、行くか」

「おうっ」

三人は歩き出す。

「メシ食おうぜー。あの食い逃げ野郎も助かったし、何とか報酬ギヤラ

も入ったしよ」

銀時の言葉にスヴェンが口を開きかけたが、トレインの声に遮られた。

「マジか！？　じゃあ高級海鮮料理のフルコースがいいなっ」

文句でも言っつてやろうとしたスヴェンだが、今度は銀時に遮られた。

「いやいややっぱ高級バイキングだろ。ケーキがあると尚のことよし」

「お前ら調子にのんなッ！！」

今日も今日とて、街にスヴェンの叱責が響く。

第四廻：大体どの主人公も過去は暗くて特殊（後書き）

この話は原作第二話にあたります。

初めは三話から初めようとしましたが、二話から。

何故こんな半端なことをしたかですが。第一話から始めても、銀さんが入る隙間がなかったのです。というか入れたらごちゃごちゃしてしまうのです。

どうせ『ブラックキャット』や『クロノス』の話が出るなら、最初は飛ばしてもいいような気がしまして……。

しかし三話から始めてかつ上記の説明を入れてしまうと、かなり窮屈になる……。

つまり、大変読み難かったのです。

なので、二話から。

言い訳、以上。

……それでは、次回お会いできることを祈りつつ。

第五廻：トラブルというものはいつだって唐突に転がり込んでくるモンだ（前書

閲覧、誠にありがとうございます。

今回は本文を消す事故もなく（前回と前々回もやりました。くそう）作成は割とスムーズでした。

……リアル多忙により、予定よりは遅くなってしまいました。

さてさてやっといヴ編（でいいのかな？）突入とあいなりました。流れるに銀さん一部空気に化してますが、ご了承くださいませ。彼の活躍はもう少し後となりますので。

今回感想をくださった銀猫さま、本当にありがとうございます。その一言一言が、この小説の糧になります。

では、五話です。どうぞ。

第五廻：トラブルというものはいつだって唐突に転がり込んでくるモンだ

猫の妖精の名を持つカフェでは、店主のアネットがいつものように開店準備を始めていた。

第五廻　トラブルというものはいつだって唐突に転がり込んでくるモンだ

くわえ煙草で皿を磨いていると、唐突に來客を告げる鐘が鳴った。

「悪いね、まだ準備中だよ」

そんなこちらの言葉に構わず、三人の男は店内に足を踏み入れてきた。

「そんなカタイ事言つなよ、アネット。もーハラペコなんだ」

その内の二人の顔をみとめると、アネットは手を止めた。

「……アンタたちかい」

見知った、というよりも見飽きた、しかし久々に見る顔だった。

「よオっ、久しぶりっ!!」

「ういース」

「どオモ」

手前から、トレインハートネット、スヴェンボルフィード。そして、見知らぬ白髪天然パーマの、変わった服装をした男。

「おや、見ない顔だね。アンタも掃除屋かい？」

「少し込み入った事情があつてな、この間パーティー入りしたんだ」

スヴェンが簡単に説明をし、

「坂田銀時でエス。一週間前から掃除屋やってまーす」

白髪の男 銀時は、まるでやる気のない、死んだ魚のような目で自己紹介をした。

「新人かい。私はアネットピアス。ここ『ケット・シー』のマスターで、情報屋をやってる。よろしく、ギントキ」

「おお」

銀時は軽く片手を挙げて応じた。

「かけなよ。注文はいつものミルクと酒と……アンタは？」

「いちご牛乳とチョコレートパフェ。あ、全部量多めで」

三人はカウンター席に腰を据えた。

「朝からかよ。つーかお前糖尿寸前なんじゃなかったか？」

「早死にすんぞー」

「いんだよ。俺ア太く短く生きるから」

二人の忠告にも、しれつと宣う銀時。アネットは、この男はある意味トレイン以上の自由人なのだろうと、密かに思った。

「はいよ。ただし量は通常サイズね。他には？」

銀時の抗議を無視して、注文の飲み物を注ぐ。

「おにぎりが食いてエ！ サケおにぎり!!」

「おにぎり？ ……まったく、うちの店に来てそいう注文する客はアンタぐらいだよ」

「へっへー」

アネットはカウンターに、それぞれのカップやグラスを置いた。

「それにしても久しぶりだねエ。最近は情報を提供してほしいっ

て電話もしてこないから、ドジって二人共くたばっちまってると思
ってたよ」

そして慣れた手つきで、パフェの準備に取り掛かる。

「ふん。そう簡単には死なねエさ」

「ドジるのはいつもの事だしな。この一か月でどれくらいのエモ
ノを逃したかわかりやしねエ」

「おまけに得体の知れねエ事件に、現在進行形で巻き込まれてる
しな」

「それって俺のこと？　ねエ、俺のこと？」

今度は皆で無視してやった。すると銀時は、少々寂しそうにスト
ローでいちご牛乳を啜り始めた。愉快的な男だ。

「相変わらず厄介事に好かれてるようだね。……そう言えば、少
し前にクロノスがあんたに接触をかけるって情報が入ってたから心
配してたが……気にする事もなかったようだね」

言いながらアネットは、フレークやチョコレートソースで層を作
ったグラスに生クリームを絞り出し、自家製のチョコレートアイス
を乗せる。ふわりと甘い匂いが、ゆつくりと店内に漂う。余談だが、
パフェはこの人気メニューの一つだったりする。

「へえーっ。さすがはアネットだな。お見通しか」

「元掃除屋の情報網を甘くみるんじゃないよ」

再び生クリームを乗せ、チョコレートソース、砕いたアーモンドをトッピング。最後にウエハースを添え、用意していたスプーンと共に、銀時の前にことりと置く。銀時は嬉々として、パフェに手をつけ始めた。

「アンタも辛い立場だよ。昔の仲間を敵にまわして、生き続ける道を選んじまったんだから……」

「……」

その言葉にトレインが笑顔を消した。刹那、

「助けて!!」

バンと勢い良く店の扉が開いたかと思うと、妙齢の女性が店内に飛び込んで来た。

「ん?」「お?」「は?」「あ?」

因みに、アネット、スヴェン、銀時、トレインの順である。

ウェーブの掛かった金髪、少し大きめのハートのペンダント、胸元が大きく空いたキャミソールにミニスカート、ロングコートにブーツと少々派手だが、その様な服装がよく似合う、なかなかの美人だ。

何事かと驚く四人を無視して、女性は一番近くに座っていたトレ

インの胸に、一直線に飛び込む。

「お願い！ 怖い人達に追われてるの！ 助けて下さい！！」

このようなモデル顔負けの美貌に抜群のスタイルを持つ女性に迫られれば、健全な男子ならばだらし無く鼻の下を伸ばすことだろう。しかし、この男は違った。

「やだ。」

（即答！？）

「コンマ一秒のスピード拒否だった。」

「な、なぜ！？」

一瞬のショックから立ち直った女性は尋ねた。まさか即決で断られるとは思っていなかったのだろう。

「これからおにぎりを食うからだ！」

「はあ！？」

そのやり取りを、アネットは呆れたように煙草を吸いながら聞き、銀時は興味なさげに再びパフェをつつき始めた。そして、自称紳士のスヴェンはトレインに蹴りをかました。

「ぶフウ！！ ……ってーなスヴェン！」

「助けを求める女を無視するとは、貴様それでも男か！」

「知るか！ 俺のハラはもう食事モードになってんだよ！」

女性は啞然として、騒ぐトレインとスヴェンを眺めていた。

「さアお嬢さん。俺はあそこの食バカとは違います。事情を話してくれませんか」

「は……はあ」

彼女は、キラキラと胡散臭い輝きを纏い近付くスヴェンに若干引き気味だ。そこでふと、スヴェンは何かに気が付いた。

「あ、あの……」

「どこ行ったあの女ア！」「この店に入ったぞ！！」

店外から怒声が飛んできた。

何事かと皆で窓の外を見ると、がらの悪い男たちが「俺たちから逃げられると思ってんのか」だの「出てこい」などと月並みな台詞を叫んでいるのだった。

「何だア？ あいつら……」

「わ、わからないんです。道を歩いてたら突然囲まれて……どうしよう、せつかく逃げてきたのに、このままじゃ……」

狼狽する素振りの女性を見たトレインは、やれやれと溜め息を付

いた。

「アネット！　うるせエゴミを掃除してくっから、おにぎりちゃんど作っといってくれよな」

女性は弾かれたようにトレインを見る。

「……いいけど、店の前で人死にはゴメンだよ」

「心配すんな！　俺は死なねエ」

「アンタの心配じゃないよ」

そんな軽口を交わしながら、トレインは店の外へと出て行った。

「あの人、一人でどうする気なんですか！？　四人が相手じゃ殺されるわ！」

女性は焦ったようにスヴェンに抗議する。

「心配すんな。何だかんだ言っても、女を見捨てるような事はしねエ男だ」

いつの間にやら煙草をくわえていたスヴェンは、何ともなしに答える。

女性に対するスヴェンの口調は、すっかり変わっていた。

「さあ！　おとなしくどっか消えな。顔が変わるくらいぶち

のめされたいなら別だがよ」

トレインはそう言って男たちに警告するが、

「へ……バカなヤロウだ。俺たちや地元最強チーム『アイアン・メイデン』のメンバーだぜ」

ピアスを沢山付けたリーダーらしき男は、そう言って笑うのみだ。一人で出て来た優男^{トレイン}に、すっかり油断をしているようだ。

一方のトレインは「何ソレ？ 全然知らねエ」と首を傾げる。

「てめエなんぞに用はねエんだ！！ そこで死んでな！！」

リーダーの一声で、男たちはトレインに襲い掛かった。

しかしトレインは余裕の笑みを浮かべると、男たちの視界から消えた。

直後、アフロの男が吹っ飛び、地面に倒れ伏した。

「！！？」

男たちは数秒遅れて、トレインがアフロの顔面に膝を叩き込んだのだということに気が付いた。

「え？」と声を上げたのは誰だったか。三人は呆けた顔を、一人の男に向けた。

トレインはゆらりと身体を起こすと、殺気を籠めた睨みを向けてやった。

「う……おおおア！！！」

言い知れぬ恐怖を覚えたリーダーは、仲間の制止も聞かずに発砲

した。それはまるでひとが目の前の獣を排除するかのよう
に。しかしトレインにそんな遅い銃撃が効くはずもなく。一発一発確
実に、最小限の動きで銃弾を避けて行く。
男たちは驚愕する。

「何だア!？」

「銃弾が……見えてんのか、コイツ!?!？」

トレインは高く跳躍すると、街路樹の枝へと軽やかに着地した。

「よー くわかつたぜ」

そしてゆっくりと立ち上がり、言い放った。

「全員入院志望者なんだな？」

男たちの顔が、恐怖に歪んだ。

「がっ」「ぐぎッ」「ヤロオオ……」

それからはトレインの独擅場だった。いや、初めから男たちの
攻撃など意味を成さなかったのだが。殴られ、投げられ、蹴り飛ば
され、次々と倒れて行った。

その様子を、女性は店の窓から静かに見つめていた。

(……強い。あんなチンピラじゃ話にならないくらい。……”

本物” のようね……)

女性は心中でこっそりとほくそ笑んだ。

「さつきとは違って変わって……冷静だな、お嬢さん」

唐突に声が掛けられた。隣を見ると、同じように傍観に徹していたスヴェンが、女性を見下ろしていた。

「本当のことを話してくれ。アンタは一体何者だ？」

(……バレた……?)

全てお見通しだと言わんばかりのその表情に、女性は焦りを覚えた。表に出さぬよう、必死に仮面を作ってみせる。

「え？ ……だから、私はあの人達に襲われそうになって……」

「……そうかい。なら！」

スヴェンは女性のコートの胸元を、勢い良く捲った。そこには、

「……何で懐にあるコイツで追っ払わなかったんだ？」

一丁の自動式拳銃が収められていた。それも、相当使い込まれた代物が。

「……気付いてたんだ。めざとい男ね……」

女性は諦めたように表情を消し、スヴェンを見返した。

「服の上からでも銃を持ってるかどうかくらい、よく見りゃわかるさ。素人の護身銃にしちゃ少々デカすぎるしな」

「……それによオ、姉ちゃん」

唐突に、今まで黙っていた銀時が久方振りに口を開いた。

「 ”変装してる” 人間警戒すんなって方が無理な話だと思っぜ？」

それだけ言うと、パフェの最後の一口を頬張った。

「……」

アネットはこっそりと感心した。何故なら銀時はこの女性を、彼女が来店した直後の ”一度しか見ていない” のだ。自分に関係がないと分かるとすぐにパフェに集中していたから。どう考えても、並の洞察力ではない。

この男共、ぷらぷらしているようで、どうしてなかなか……。

「ぐえッ！」

……どうやら、外では決着が付いたらしい。

「……さあて、まだやんのか？」

トレインは余裕綽々といった態度で、右手を広げてみせる。

「……………」

「何だよコイツ……………こんな強えなんて聞いてねエよ……………」

「ジョーダンじゃねエ……………話が違うぜ!!」

「こんな芝居にこれ以上つきあってられるか！」

ボコボコに痛み付けられた男たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げて行ってしまった。

「……………芝居ねエ」

トレインは彼らを見送ると、背後に声を投げた。

「どういう事が……………説明してほしいなア、オジヨーサン」

そこには、いつの間に出て来ていたのか、スヴェンと銀時、そして女性が立っていた。

「……………全く、大したものね。貴方も、貴方の相棒さんたちも」

女性は腕を組み、先程とは打って変わって馴れ馴れしい態度で語る。

「苦労して入手した情報がガセネタじゃなくて安心したわ」

嬉しそうに目を細め三人の顔を順に見ると、

「……………気に入ったよ、三人共」

不敵に、笑った。

第五廻：トラブルというものはいつだって唐突に転がり込んでくるモンだ（後書

カフェにいちご牛乳があるのか。

本当にアネットさん宅の人気メニューケット・シェーがパフェなのか。

そもそもパフェがメニューに置いてあるのか。

……すみません、全て私の想像もとい妄想です。

こうだったらいイナー、と。

……あ、ちょ、石を投げないください。

でもこれからもこういった妄想が随所に見られると思います。

ていうか出します。そこは譲りません。

流れや設定をいじれない時にこういう細かいところをいじると楽しくて（オイ

……では、次回もお会い出来ることを祈りつつ。

第陸廻・シッコロミはいつでもどこでも解りやすくて確に(前書き)

閲覧ありがとうございます。

私的には結構早めの更新ですね。

しかし、携帯代えると文字が打ちにくいですね。

……それはいいとして。最近この小説の外伝を書こうかなと思案中です。

詳細は後書きにて。

感想を下さった銀猫さま、s o l a さま、誠にありがとうございます。

では、本編どうぞ。

第陸廻…シッコミはいつでもどこでも解りやすくて確に

「お探しの通り！ 今の奴らを仕向けたのは私自信。軽い悪戯心って奴よ」

女性は悪びれもせず、くすりと笑う。

「貴方たちが本物が確かめる為に、地元のチンピラに声を掛けて一芝居打ったの。ちょっと色気使って迫るだけで言いなりになってくれるんだから、カワイイよねエ」

言いながら女性は、するりと頭上の鬘かづらを外す。すると金糸フロントの下から、地毛であるう薄紫色のセミロングが露わになる。

銀時はその髪色を見て、あからさまに厭そうな顔をした。スタイルについてもそうだが、どこぞのDMKのいちを彷彿とさせたのだ。

「あ、この変装はね、いつものことなの。気にしないで。素顔が売れると仕事がやりづらくなるからネ」

どうやら女性は、銀時の反応の理由を間違って受け取ったらしい。

「いや、変装については別にどうでもいいけどよ……」

「……誰だお前」

トレインはそこでやっと、疑問を口にした。

「リンス。リンスレット＝ウォーカー。盗賊なの。御存知ない？」

(！ リンスレットだと……?)

スヴェンは直ぐさま反応し、リンスレットと名乗る女性を睨む。しかしその名に覚えのないトレインと銀時は、一様に首を捻った。

「知らね。俺この世界に飛ばされてから一週間くれエしか経ってねエし」

言いながら銀時は自らの天然パーマに指を埋め、がしがしと搔く。リンスレットは不思議そうに銀時を見たが、まあいいわ、と再び三人の顔を見渡す。

「ねエ。貴方たち、今は掃除屋なんだよね。私と同盟を組まない？ 素敵な仕事の話があるのよ」

「ビジネスう？」

トレインが少しの警戒を込めて声を上げた。

「貴方の力が必要な……かつて抹殺人^{イレイザー}として世界の要人に恐れられた、黒猫^{ブラックキャット}のね……」

第陸廻 ツッコミはいつでもどこでも解りやすくて確に

「……いやー、このアジトに戻って来るのも久しぶりだなア」

数時間後、三人はその街のアジトへ足を運んだ。

「長い間放つといたから、すっかり寂れちまってるもんと思ってたぜ」

言いながらトレインは、窓ガラス越しに外を覗く。

「アネットに管理を頼んであるからな。その心配はねエさ」

スヴェンはソファに腰掛け、煙草を取り出す。因みに銀時はとうと、部屋に入るなりスヴェンとは向かいのソファに寝転がり、傍にあつた雑誌を顔に被せると、あつという間に夢の世界へと旅立ってしまったていた。

「そつか！ あ、けどよう、さっき見たけど食いモンが全然なかつたぜ！」

「そりゃそうだろ。前にここを使ったのは、一ヶ月近く前だぞ。地下室の非常食も全部駄目になってたし……後で買い出しにいかんとな」

言いつつ、スヴェンは煙草に火を点けた。

「別に宅配ピザでも頼みゃいいんじゃないか？ どうせここにゃ長居はしねえんだしよ。……ギントキもそれでいいか？」

トレインが銀時の耳元でおい、と声を掛けると、のっそりと右腕が持ち上がり、二、三度ゆらゆらと左右に揺れて、ぱたりと落ちた。どうやら了承の意らしい。

スヴェンはそのやり取りをじっと見つめた後、再び口を開く。

「トレイン」

「んあ？」

「お前、ホントにあの女の持って来た同盟の話……受けるつもりなのか？」

＝
＝
＝

「貴方の力が必要な……かつて抹殺人として世界の要人に恐れられた、黒猫のね……」

「へエ……。俺の素性を知った上で、同盟を組もって？」

トレインは半目になり、心底呆れた様子で言った。

「そ」

リンスレットはにっこりと笑顔を向けた。

「いい度胸してんな……」

「……あのさア」

突如、気の抜けた声が上がった。自然と声の主　銀時へと視線が集まる。

そして彼は着流しの懷に腕を突っ込むと、こう言ったのだった。

「なんか話長くなりそうだから、先帰ってていい？　腹膨れてすっげエ眠イんだけど」

そしてのっそりと踵を返した。

「……えっ。ちょ……ちょちょちよつとオ！　待ちなさいよ！！」
突然のことに安心してしまったリンスレットは、我に返ると慌てて銀時の肩をひつつかんだ。

「ンだよ、用があンのはトレインなんだろ？　俺カンケーねエじやん」

心底面倒臭そうにリンスレットを見下ろす。

「そりゃ主にはそうだけど！　でも私はアンタたちのセットで同盟組んで貰いたいのだ！　そりゃ掃除屋なりたてのアンタの実力なんて知らないし他の二人が良いってんなら私はいなくても別に良いけど！？」

「じゃあ良いじゃんよ。っーかオメー、ツッコミ回るんならもっ

と上手くツッコめよな。もつと短く、解りやすく、的確に。うちの
新八の方がよっぽど上手エぞ。ツッコミのプロだぞ」

「うっさいわね!! どうでも良いでしょ!!」

「良くねエよ。新八アツッコミに命懸けてんだぞ。ツッコミのな
い新八なんざ、タダの駄眼鏡なんだぞ」

「ただけ必死なのその子!? …… ってああもう話が逸れた!
アンタ! 相棒の素性を知る相手目の前にして、気になったりは
しないワケ!?」

「別にイ?」

「ハア!?!」

銀時は呆れたように溜息をつく、小指を鼻孔に突っ込む。

「過去は過去、いま現在は現在。大事なのは、そいつが現在をどう生
きてるかだ。大体、そんなモン一々過去気にして人付き合いなんざしてたらキ
リがねエ。それよりも、毎回のメシをどうするか考える方が、よっ
ほど有意義だぜ。それに……」

「……それに?」

突然まともなことを話し出した銀時に少々気圧されたリンスレッ
トだったが、たじろぎながらも聞いた。

「少年漫画の主人公に暗い過去はツキモノなんだぞ」

「いきなり何の話!?!」

「男ってなアな、辛い過去を乗り越えて強くなるんだぞ」

「だから何の話かって聞いてんのよオオ!!」

会話にならない会話を続けていると、スヴェンが横から声を掛けて来た。

「ギントキ。第一お前、この街のアジトの場所知らねエだろ」

「それに俺だってまだおにぎり食ってないんだぞ！」

スヴェンは呆れ、トレインは子供のようにはぐれた。

「いや、そっちイイ!?! 私の話は!?!」

「ンだよっせーなア。耳元で騒ぐなよ、ドMストーカー」

「誰がドMよ! それにストーカーじゃない! 私はリンス!」

完璧に銀時のペースである。

スヴェンは、ああもうこれ終わんねーよ、と心中で呟き、無限のループにストップを掛ける。

「……さつき盗賊と言ったな。お前が」あの” リンスレット
”ウォーカーだと言うのか?」

「何だ？ 知ってんのかスヴェン」

トレインは何事も無かったかのように聞く。銀時とリンスレットもスヴェンに注目する。どうやらスヴェンの ” 話題を逸らす作戦 ” は成功したようだ。

「ああ。リンスレットはウォーカーと言やア、その筋じゃ有名な『泥棒請負人』さ。その女は依頼さえされれば、どんな物でも盗み出す。高額報酬と引き換えにな」

「泥棒請負人だア？」

トレインは胡散臭げに片眉を上げた。

「各国の政府やマフィアのお偉いさんの中にも、リンスの世話になつてる連中は多い。他国の極秘情報や入手困難な品物を、リンスに盗んで来て貰うって訳だ」

リンスレットはクスツと笑うと、優雅に前髪をかきあげた。

「其処まで御存知なら話は早いわ。ふふふ」

どうやら調子を取り戻しつつあるようだ。

「実は私、今度ある大きな仕事をするんだけど……一人でやるにはちょっと骨が折れそうなのよネ」

リンスレットは「そ・こ・で!」と、声のトーンをあげ、

「噂に聞いた掃除人スイーパーの貴方たちに、私と組んで共同戦線を張って貰えたら助かるな！、って思ったワケ！」

トレインはふんと鼻を鳴らすと、ち、ち、ち、と指を左右に振った。

「ブワーカ。俺たちやこれでも合法的なプロのスイーパーだぜ。盗つ人に手を貸すワケにいくかつての！」

しかし尚モリンスレットは笑みを浮かべたまま。

「違うわ。貴方たちは貴方たちの仕事をしてくれればいいのよ。

……掃除の仕事をね」

胸元から一枚の紙を取り出し、ぴらりとこちらに向ける。それは、一枚の写真だった。そ

「貴方たちの次の標的エモノ……この男にしてみる気はない？」

それには、左のこめかみに大きな傷痕を持ち、葉巻をくわえた初老の男性が写っていた。

トルネオールドマン。通称『闇の商人』とも呼ばれ、ソニア大陸で近年勢力を伸ばしている、武器密輸組織の頭目である。

彼の首には五千万イエンという莫大な賞金が懸かっており、既に彼を狙う掃除屋も多くいるのだという。

トレインが以前見た、高額賞金リストに記載されていた顔と情報とも一致した。どうやら嘘ではないようだ。

ふと、銀時は瞬きひとつ、

「え？ トルネコ？」

「トルネオよトルネオ！ ト・ル・ネ・オ！！ 誰が大冒険するなんて言ったのよ！」

「バツカ、オメーそこは商人つっのと名前が一文字違いなことを活かしたツツコミをだな……」

「もういいからテメーは黙ってる！」

スヴェンは銀時の脳天を叩いて黙らせ、リンスレットに話を戻すよう促す。リンスレットは咳ばらいひとつ、話し出す。

「私の狙いは、彼が数年前から進めているある研究データ。苦勞して彼の所在は突き止めたんだけど、彼の屋敷は厳重な警備セキュリティで守られてて、迂闊には侵入出来ない」

リンスレットは、びしっと鋭くこちらを指差し、

「でも、貴方たちとなら不可能じゃない！ 私は必要な『知識』！ 貴方たちは『実力』を互いに提供すれば、それぞれの目的をきつと果たすことが出来ると思うの！！」

トレインは頭の後ろで手を組み、にやりと口角を吊り上げる。

「……なるほどねエ。けどお前だつて一応お尋ね者なんだろ？ お前を捕まえて突き出しても結構な値段になるんじゃないのかい？」

「お生憎様。政府は私のお得意様よ。私の犯罪を認めるってことは、自分たちの悪事を認めるようなもの。賞金なんか出せるワケないわ」

つまりは、彼女が犯罪者として裁かれることは、何があってもないということだ。

スヴェンは「なるほど」と呟き、嘆息する。

「貴方たちの選択肢は二つ！ 私と組んで人生のギャンブルを試してみるか……臆病風に吹かれて逃げ出すか」

トレインの眼が鋭くなる。彼女の言葉は、完全に挑発を含んでいた。

リンスレットは心中で意地悪い笑みを浮かべると、歩き出した。

「その気になったら三日後、サピドア共和国に来てね。勿論、勇気が無ければ引き下がってくれて結構だけど……じゃ……」

期待してるわよ……黒猫さん

|| || ||

「……！」

窓外を眺めていたトレインの眼が、
”あるモノ”
を捉えた。

「俺は反対だぜ！ レディには優しくするのが紳士道だが、あの女は例外だ。信用出来ねエ」

スヴェンはそんな彼の様子に気付かぬよう、尚も言い募った。

「……けど、このまま黙ってるワケにゃ行かねーだろ」

トレインは静かに言うと、『X I I I』の文字が彫られた黒い愛銃“ハーデイス装飾銃”を抜き、窓を大きく開く。

「……おい？」

スヴェンは怪訝に思い声を掛けるが、トレインは何も答えなかった。

しかしその代わりに、極々自然な動作で庭の向こうの植木に狙いを定め 発砲した。弾丸は音速の速さで真っ直ぐに飛び、木の枝に留まる鷹の頭を吹き飛ばした。鷹はバネやらネジやらの残骸を撒き散らしながら、重力にしたがって真っ逆さまに転落した。

「……なア、スヴェン。報酬ギャラも危険リスクも超一級……どこにも俺らが引き下がる理由はねエんだぜ」

トレインは硝煙の上がる銃口を上げ、スヴェンに向き直る。

「何より！ あの女は俺たちを甘く見てる」

そして装飾銃を肩に担ぎ、笑う。

「このまま引き下がったんじゃ、黒猫オレの名にキズがつく……！」

スヴェンは諦めたようにゆっくりと煙を吐き出した。

「……やれやれ仕方ねえ……乗ってやるよ。お前の我が儘は今回に始まったことじゃねえしな……」

トレインとスヴェンは気付かなかった。眠っていた筈の銀時の手が、そつと肩に伸びたのを。被さった雑誌の下で何かを小さく呟き、小さな小さな音と共に、何かを握り潰したのを。

とあるホテルにて。リンスレット＝ウォーカーは、砂嵐しか映さなくなったモニターと、何の音も発しなくなったスピーカーを前に、驚愕の表情を浮かべていた。

「嘘……。私が仕掛けといた鳥型望遠カメラと虫型盗聴器に……気付いたっての？」

(カメラは百メートル近く離れてた……それに……)

話の途中で勝手に帰ろうとした、あの失礼な白髪頭の肩を掴んだ時、咄嗟に仕掛けた特注の羽虫型盗聴器。自分の変装を見破ったとはいえ、解りにくい箇所仕掛ければ気付かれないだろうし、万が一の場合もただの虫だと思ってただ処分するだけだろうと、今まで

これを使った者たちの例を思い返していた。なのに。

(……『あんまナメてんじゃねーぞ』?)

気付かれていたのだ。初めから。

おまけに、逆に警告の言葉まで叩き付けられてしまった。

(……これが……ブラックキャット黒猫と……あの白髪アイツの……)

口から、小さな吐息が漏れた。

彼女は彼らを、見くびり過ぎていたのだ。

「……面白いじゃない……」

眩きと同時に、顔を笑みの形に歪めた。

「私が手駒に出来なかつた男は居ないのよっ！ あんたたちも……

……利用するだけ利用してやるわ……！」

やる気十分、元気に拳を突き上げた。

「よーし！ 景気付けにシャワータイム！」

「……随分と警備が厳重だな、トルネオさん」

「ふふ……。近頃は私を狙うスイーパーや密偵が後を絶たないもので……」

「それは大変だ。心中お察しするよ」

「いやいや、貴方程ではありませんよ。政府だけでなく、あの『クロノス』からも追われる身とは……私などには考えられない」

「フフ。だが君は、そんな僕に力添えをしている。何とも酔狂な男だね」

「くくく……。私は思うのですよ。貴方なら百億イエンを費やした、私の『神の研究』を必ず生かすことが出来る。この退屈な世界を、ぶち壊すことが出来るとね……!」

様々な思いが巡る。

運命の歯車は、まだ廻り始めたばかり。

第陸廻：ツッコミはいつでもどこでも解りやすくて的確に（後書き）

前書きに続き、外伝について。

内容は、本編ではあまり語られないであろう、オリキャラ・フィルの江戸調査のもよう……的なの？）

これだったら、なかなか本編に出られない銀魂キャラも存分に出て来れるかなあ……と思ひまして。

まあもしやるとしても、一から十まですべてを書く訳ではないですし、本編より不定期更新は確実ですが。

……うーん、どうしようか。

でもウチのオリキャラを主人公にしても、皆さんあまり興味ないかな……とか思ったり。

もう少し考えみようと思います。

それでは、次回もお会いできることを祈りつつ。

第質廻：ナノって言葉自体何かかっこいい 近未来って感じで（前書き）

閲覧誠にありがとうございます。

いつの間にかアクセスが25000を超えていました。

こんな拙い文章を気に入って頂けているのなら幸いです。

お気に入り登録が増える度ににやにやしています。

皆様、本当にありがとうございます。

第質廻：ナノって言葉自体何かっこいい 近未来って感じで

泥棒請負人、リンスレット「ウォーカーの接触から三日後。銀時たちは彼女と同盟を組むべく、海辺の小国、サピドア共和国へとやって来た。

第質廻 ナノって言葉自体何かっこいい 近未来って感じで

三人が空港内を歩いていると、不意に声を掛けられた。見ると、女性が腕を組んで柱に背を預けていた。リンスレットだ。アロハシャツを着こなし、セミロングだった髪は肩の上で切り揃えていた。

「ふふっ。本当に来てくれるとは思わなかった!」

そんなことを言う彼女に、スヴェンはふんと鼻を鳴らした。

「来ると分かってたからここに居るんだろ」

「白々しい奴!」

「もーっ、そんな意地悪言わないでよ。それより私、お昼まだな

んだア。一緒にどうぞ？」

「おっ！ いいね」

会話もそこそこに、三人は空港を後にした。

数時間後。サピドア市街の、とあるオープンレストラン。

「あれエ？ ねエ、トゲトゲ君は？」

それぞれ食後のクリームソーダとコーヒーを楽しんでいた銀時とスヴェエンに、席を外していたリンスレットが声を掛けた。スヴェエンはカップを置いて答える。

「トレインなら出掛けたぜ」

「えー、何処に？ これから今後の手筈について、説明しようと思っただのにサ」

「説明ならもう聞いたじゃねエか」

「まだトルネオの屋敷の場所を教えただけでしょ！？」

「場所だけ聞けば充分だ。俺たちには俺たちのやり方があるからな」

「……は？」

リンスレットは間の抜けた声を上げた後、その言葉の意味を理解して声を荒げた。

「ちょっと待って！ それじゃ何の為の同盟なのよ！ 勝手な」とされちゃ、こっちが困るわー！！」

銀時は耳に小指を突っ込み、顔をしかめた。

「ギヤーギヤーギヤーギヤーやかましいんだよ。生理中の女子高生ですかコノヤロー」

「乙女の前でそういうこと言わないでくれる！？」

「え？ 乙女って、何処に？」

リンスレットは、きよろきよろとわざとらしく周囲を見渡す銀時を思い切り睨んで怒鳴り付けた。

「アンタの目の前よー！！」

「お前ら面倒くせーからそろそろこの会話パターンやめろー！」

スヴェンは煙草を口に挟み、火をつけた。

「……リンスレット。勝手に困るなら、お前がこっちに合わせりゃいいだろ。他人にペース握られるのは俺らの性分じゃねエんだよ」

「？ ……ねエ、もしかしてアイツ……」

「屋敷に敵情視察しに行つたぜ」

銀時がさらりと行って退けた。

「敵情視察う！？ 何考えてんのよアンタたち！ ドジったりして敵にこつちのことを察知されたりしたらヤバいじゃない！」

スヴェンは銀時と視線を交わしてから、ふうー、と肺に溜まった煙を吐き出した。

「……お前、アイツが伝説の抹殺人、イレイザー『ブラックキャット』だど知つたから声掛けて来たんだろ？」

リンスレットはぐっ、と言葉に詰まった。

「だったら、そんなのいらねエ心配だつてことくらい、分からねエか？」

悠悠閑閑とした様の二人を不安げな瞳でじつと見つめ、そしてほんの少し唇を噛んでから再び口を開いた。

「……私は、トルネオを甘く見るなつて言つてんの。アイツはただの武器商人じゃない！ 屋敷の地下に研究所を作つて、とんでもない研究を……。！」

そこまで言つて、自分が喋り過ぎてしまったことに気が付いた。慌てて口を噤むが、もう遅い。銀時とスヴェンは鋭く細められた眼

でリンスレットを見つめている。

「……そーいやお前の狙いは、奴の研究データとか言ってたよな」

「そ、そうよ」

「俺たちと共同戦線を張るんなら……聞かせてくれてもいいんじゃないか？」

スヴェンは灰皿で煙草の火を揉み消した。

「奴の研究ってのは、一体何なのか……」

「……」

リンスレットは言うべきかどうか、迷っている様子だった。暫しの睨み合いの後、とうとうリンスレットが折れた。

「……分かった、話してあげるわ」

スヴェンは自然と身を乗り出した。

銀時は変わらぬ態で、クリームソーダを食べ続けた。

「トルネオが研究しているのはね、『人を超えた人』の研究」

スヴェンは目を見張った。

「人を超えた……人？」

リンスレットは勿体振るように一拍置いてから、こう言った。

「……究極の生体兵器バイオウエボンを生み出す研究……!!」

銀時は口に運ぼうとしていたさくらんぼを、口の前でぴたりと止めた。

「……バイオウエボン？」

「『ナノマシン』って知ってる？」

質問を質問で返された。

銀時は首を捻った。

「何だそれ」

「ナノマシンって言うのは」

ナノマシンとは、十億分の一メートルサイズの超微小ロボットを応用した工学技術。正しく使えば、DNA構造を弄って難病を克服したり、分子を組み換えて新しい物質を生み出すなどということが可能になる代物である。

トルネオは巨額の資金を注ぎ込み有能な科学者を集め、ナノマシンの兵器への利用を考えた。

その結果、培養したヒトの体内にナノマシンを組み込み、自在に自分の形態を変化させる能力を持った生体兵器の開発に成功したというのだ。

「つまりアイツの目的は、ナノテクノロジーの軍事利用」

三人のテーブルに、重苦しい沈黙が降りた。

「何かとんでもねエ話だなア、オイ」

銀時はそう言ってストローに口をつける。

「解った？ だから甘く見るなって言ったの。いくらアンタたちでも、命の保障はないわ」

リンスレットは腕組みをして背もたれにもたれ掛かった。

「どうする？ 尻尾を巻いて逃げ出すなら今の内よ。……死にたくなければね」

スヴェンは内心で舌を打った。何かあるとは思っていたがこの女、初めからその生体兵器の相手をさせる為に、自分たちに同盟の話を持ち込んだのだ。

(……まったく、だから信用ならねエつつつたんだ)

スヴェンは今は居ない相棒に毒づきつつ、再び思考する。

もし、本当にそんなモノをトルネオが完成させているのなら、確かに厄介な話である。厄介事には慣れているが、骨が折れることは必須だろう。

自分としてはこんな安い挑発に乗るほど馬鹿ではないつもりだし、

手を引くことはトレインが許さないだろう。しかし断るのは、
” 契約前なら” の話。

「馬鹿にすんなよ」

「え？」

スヴェンは鋭い眼でリンスレットを見据える。

「一度同盟を結んだんだ……しっかりこなしてやるさ、この仕事。ただ、勘違いはするな。俺はお前の挑発に乗った訳じゃねエ。これは俺たちの掃除屋としてのプライドと、トルネオに掛かった賞金の為だ」

暫し睨み合った後、リンスレットは「そう」と不敵に微笑んだ。

「じゃ、改めて契約成立ね」

「ああ」

銀時は会話が途切れたのを確認すると、氷で薄くなったクリームソーダを飲み干した。

「……さて、メシも食ったし、そろそろ宿に戻ろうぜ」

銀時は椅子から立ち、大きく伸びをしながら言った。

「そうだな。それにトレインも帰ってきてるかもしれん」

「あ、どの道連絡は入れるつもりだけど、アイツに言っというよ。今度は勝手なマネはしないでっさ！」

スヴェンは新しい煙草を取り出しながら、軽く口の端を上げた。

「言っても無駄だと思うぜ、アイツは」

リンスレットは不安げに声のトーンを落とす。

「……………ねエ。まさかアイツ一人で乗り込んでドンパチ……………ってことはないよね」

スヴェンは心配無用とばかりに言った。

「そこまではやらねエだろ。いくらアイツが危険大好き人間って言ってもな」

「じゃアな、狸」

そう言うと、銀時とスヴェンはその場を去った。

「……………信じても言いのかしら……………」

リンスレットは二つの背中を見つめながら独り言ちた。

(思った以上に使いづらい連中だわ。元・伝説の抹殺人『黒猫』と、その相棒……………)

リンスレットはさらりと耳に掛かった髪をのけ、

「流石に、一筋縄ではいかないってワケね」

グラスを持ち上げて薄く笑う。

「それでも最後に笑うのはこの私……なんだけど」

生温い風が、通り過ぎた。

「オメー、本気でアイツが何も起こさねエって思ってたの？」

銀時は道中、スヴェンに聞いてみた。

スヴェンは苦い顔を見ると、首を左右に振った。

「……あの女にはああ言ったが……アイツなら先走りは充分有り得るんだよな」

「だよな」

二人の脳裏に、ケケケと笑うトレインの顔が浮かんだ。

まだ付き合いは浅いが、銀時にもトレインのあのはた迷惑な奔放さは理解出来ていたのだ。

「一応連絡してみた方が良くないじゃねエの？」

「……そうだな」

スヴェンが盛大な溜め息と共に頷いた直後、携帯電話が鳴った。

「おおッ！！？」「お？」「

スヴェンは驚いて飛び上がった。

可笑しそくに指を差して笑う銀時を睨み付けながら、通話ボタンを押した。

直ぐに電話の向こうからくぐもった声が聞こえて来た。テンションの高さからしてトレインだろう。

「トレインかッ！ 心配してたんだぜ、無茶してんじゃねーかな！」

どうやら正解らしい。

「……で、今何処だ？」

刹那、スヴェンはぴしりと固まった。

銀時は不審に思って首を傾げた。

「てめエっどどういうことだ！！？」

スヴェンが怒鳴り声を上げた。

銀時は悟った。ああ、あの馬鹿トルネオんとここで何かやらかしたな、と。

ハアと嘆息して視線を逸らすと、小さな黒と金色の塊が、目の端を駆け抜けた。その直後、どんと云う音と、男の声がその場に響いた。

第質廻：ナノって言葉自体何かかっこいい 近未来って感じで（後書き）

銀さんスヴェンルートで『彼女』と接触です。

ていうかこの人スヴェンとばっかだな。いやでもトレインみたく行動派じゃないしなあ…。

…うん、まあいいや、オッサンズということで（銀猫さん、使っちゃいました（笑））。

それでは次回もお会い出来ることを祈りつつ。

第捌廻：類は友が分かる（前書き）

閲覧誠にありがとうございます。

……何が起こったのでしょうか。

前回の更新からアクセス数が一気に跳ね上がりました。ついでお気に入り登録も。

びっくりついでにとても嬉しいです。読者の皆様、本当にありがとうございます。

更新が遅い上に拙い文章ですが、頑張つて書いております。これからもよろしくお願い致します。

コメントを下さった武士堂さま、本当にありがとうございます。大変お待たせ致しました、今回はちゃんと『彼女』が出て来ますので。

では、本編どうぞ。

第捌廻：類は友が分かる

「おいガキイ！ 人にぶつかっておいで挨拶もナシかア！？」

ドスの効いた声が、往來に響いた。

第捌廻 類は友が分かる

何事かと振り返れば、丸刈りの敵つい男が、幼い少女相手に何かを喚き散らしていた。

「オラ、待てよ！ ゴメンナサイはどうしたア！？」

(……………何だアレ)

と、銀時は思った。……………誰がどう見ても、幼気いたいけな少女にイチヤモンをつけるチンピラの図である。

銀時はきよろきよろと辺りを見渡すが、道行く人々は我関せずと云った態で足速に去って行く。

ちらとスヴェンを見やるが、まだ通話中のようので、電話口に向かって何か必死に喋っている。

そして再び男と少女を見るが、男の暴拳が止む気配はない。

銀時は肺に沈澱していた、泥土のように重く、粘っこい息を吐き出した。

「……………たく……………」

面倒臭そうに顎を撫でると、その場から数歩下がった。

「……………おじさんも、おじ……………してるの……………?」

少女の口から酷く鈴やかな、しかし少しの感情も籠らない声で、そんな拙い言葉が発せられた。怯えるでもなく。ただただ淡々と。

「ああ!?! 何分かんねエこと言っつてやがる! 親呼んで慰謝料請求すつ」

「とつっ」

「ふごオ!?!」

銀時の両足裏が、男の側頭部に見事ヒットした。
そして男は見事に 否、無様に吹っ飛んだ。

「……………つて、テメー何しやがる!?!」

男は直ぐ様起き上がり、鼻血を吹き出しながらドスドスとこちらに戻って来た。

「何っつて、ドロップキックの練習」

銀時は当然だろうとでも言わんばかりに言い切った。

「んなモン違うとこでやれやアア！ ジム行きやサンドバッグがあんだろがア！！」

「サンドバッグって意外と痛エんだぜアレ」

「知るかアアア！！ オレの方が痛エわアア！！」

男はひとしきり叫ぶと、息を整えた。意外に切り替え上手らしい。

「おいテメー、このガキの保護者か？」

「ああ？ 知らねエよ、赤の他人だ。何、ガキ出汁に使って、力ツアゲでもしようつての？ 今時そんな化石並に古い手使って、恥ずかしくねエ？」

銀時が鼻を穿りながら述べてやると、男は顔を真っ赤にして向かって来た。

「ツクソ、ナメやがって！ ぶっ殺してやる！！」

ぶんと思い切り殴り掛かった。

しかし男の拳は、銀時には届かなかつた。 彼が一瞬にして、

男の背後に回っていたから。

「……で。誰をぶっ殺すつて？」

冷たい声音で問い、のんびりと木刀の切っ先を男の首筋に当てて

やると、今度は真っ青になって震え上がった。

「…………い、いえ…………な、何でもない、でしゅ」

噛んだ。

男はそれだけ言い残すと、すたころとその場から逃げて行った。相当なヘタレだ、と確信した。

「つたく」

銀時はこれまたのんびりとした動作で、木刀を腰に納めた。

そして少女に向き、その無骨な掌でわしゃわしゃと頭を撫でてやる。

「じゃあな。またあんなに引つ掛からねエ内にさっさとウチに帰んな」

そう言い捨てて歩き出すと、くいと腰の辺りが引かれる感覚。

「ん？」

見ると、少女が銀時の着流しを、指先で遠慮がちに握っていた。

正直なところ、この引き止め方はこの世界に来る要因となった出来事を思い起こすのでやめて欲しいのだが。

「……………………何だよ」

無反応。

数秒待ってもみたが、少女が答える気配はない。

銀時は面倒臭そうに頭を掻いた後、屈み込んで少女の顔を覗き込んだ。

「何か用？」

歳は八つ……いや、十くらいだろうか。金色の長く、真っ直ぐに伸びた綺麗な髪。服装は黒一色の長袖とスカートにショートブーツという、そのような年頃の少女が身につけるには、かなり地味なもの。

まるで葬式のような格好だ、と銀時は思った。いや、今時葬式でももう少しましな装いをするだろう。

銀時がそんなことを考えている間、少女も感情の読み取れない無垢な赤紫の瞳で、銀時の死んだ魚のような濁った眼を見つめていた。

「……わたし、おになの」

やがて少女はぽつりとそう言って、再び口を閉じた。

銀時は眉間に皺を寄せた。

「鬼？　なんだそ」

問い掛けた刹那、ふと少女の瞳が、かつての『』と重なった。

(そうだ、この瞳は……、)

「　　おい、どうしたギントキ。……てかなんだそいつ」

はっと我に返った銀時が振り向くと、

「……スヴェン」

いつの間にやら通話を終えていたスヴェンが、こちらに歩み寄って来ていた。

「おにごっこ、してたの」

少女が再び口を開いた。

「ん？ 鬼ごっこ？」

その小さな声を聞き取ったスヴェンが反応した。

「うん。でも、みうしなっただの」

「そりゃ困ったな。仲良しの友達と遊んでたのか？」

銀時を置いて、自称紳士と少女の会話は続く。

「ううん。しらないひと」

「？ 何だそりゃ。お前、ウチは何処だよ」

少女は数秒はたと固まった後、きよときよとと辺りを見渡し、言った。

「わかんない。こっ、どっ？」

スヴェンはひくりと顔を引き攣らせた。

「……おいおい。まさか、迷子ってヤツか？」

少女は道の向こうを見つめたまま答えない。

スヴェンは困ったように、隣に立ち尽くす銀時を窺うが、彼は静かに少女を見つめたまま、何も応えなかった。

数分後、銀時たちは最寄りの噴水広場へとやって来ていた。

スヴェンは少女をベンチに座らせると「ちょっと待ってる」と言い残し、何処かへ行ってしまった。銀時はスヴェンを見送った後、少女の右隣　ベンチの端　に腰掛けた。

横目で少女を見るが、彼女はずっと物珍しそうに眼前に目を馳せている。彼女の視線を追ってみた。

週末の昼下がりと云うこともあってか、広場はそこそこ賑わいを見せている。足早に通り過ぎる、学生風の女性や書類を抱えるサラリーマン。噴水の縁に腰掛け、談笑するカップル。それは何処かのサングラスしか特徴のないホームレスのように　ただぼんやりと虚空を見つめる男性。群がる鳩に餌をやる老人　。平和な時を、皆思い思いに過ごしていた。

もう一度、少女に視線を戻す。彼女は飽きもせず、ただただそんな長閑な光景を眺めていた。

何がそんなに珍しいのだろうか。尋ねてみようかと口を開きかけた。

「……おじさん」

「おじさん!？」

銀時は物凄い形相で、勢い良く、声の主である少女に向いた。近くに寄って来ていた鳩が数羽、驚いてその場を飛び去った。

「……………あのさア、おじさんはやめてくんない？ 銀さんまだまだピチピチだからね？ これでも少年誌ジャンプの主人公だからね？ せめて『お兄さん』て呼んでくんない？」

「……………？ ……ギン、さん？」

少女はきょとんと可愛らしく首を傾けた。どうやらそちらの呼び方の方がお気に召したようだ。

寂しさと云うべきか悲しさと云うべきか、ちよっぴり感じる胸のもやもやを脇に置いて、少女の次の言葉を待った。

「……………ギンさんも……………わたしとおんなじにおいがする……………」

「……………臭い？」

訊いた。胸中に、じんわりと熱を帯びた何かが湧いて来るのを感じる。

少女はこくりと小さな頭を小さく縦に揺らした。

「ちの、におい」

「……………」

僅かな動揺を隠しつつ、銀時は再び閉口した。
少女の虚ろな硝子玉の瞳は、真っすぐにこちらを見つめている。
銀時は少女から視線を外し、己のしろい髪を粗っぽく掻き回した。
まるで全てを見透かされているようで、なんとも居心地が悪かったのだ。

(これだから、餓鬼は苦手なんだ)

銀時が答えあぐねていると、スヴェンが向こうから戻って来るのが見えた。二段に積まれたアイスクリームを、二つ持って。

「ほれ！ コイツでも食って、これからどうするか考えようぜ」

スヴェンは一方を少女に手渡すと、少女を真ん中にして掛ける。
少女は食べるでもなく、手の中のアイスクリームをただじっと見つめている。

銀時は少女の関心が逸れたことに内心安堵しつつ、しかしそれをおくびにも出さずに、アイスクリームを食べはじめたスヴェンに疑問をぶつけた。

「アレ？ 俺の分は？」

「アホか。自分で買って来い」

言っと思った。

ちえつと子供のように口を尖らせ、どっこいしょ、と重い腰を上げた。

「オヤジ」

「オメーに言われたかねーよ」

軽口の後、スヴェンに店の場所を教えて貰い、銀時はアイスクリーム屋を目差して歩く。

広場を出ると、道の端にピンクを基調とした小さな車が停まっていた。キャンピングカーを改造したらしい、中々小洒落たアイスクリーム屋台だ。

丁度母娘連れが、入れ違いに店を離れた。アイスクリームを片手に、笑顔で会話を交わしながら去って行く。その何とも微笑ましい光景に、思わず笑みが零れた。

銀時は店員に、ストロベリーとチョコレートチップ、更にキャラメルを三種を注文した。代金を支払い、品を受け取る。店員の「ありがとございました」に軽く応え、踵を返す。落とさないよう気をつけて、食べ歩きながらベンチに戻ると、スヴェンと少女の話し声が聞こえて来た。

「……んー、そつだな。目の前の景色が全部、人間で埋まっちゃうよつなところもあるぜ」

「ほんと？」

「おう！ ビスタシティで年に一度開かれる芋投げ祭なんかすげエもんさ。人混みで動けなくなるからなア。いつかお前も行ってみるといい。飛び交う芋には要注意だがな」

表情に乏しい少女に起きた、小さな変化。それは、少女の瞳に光が宿った瞬間だった。

銀時は静かに笑むと、いつの間にか止めていた足を再び動かした。

「おーおーおー。人がちよつとアイス買ってる間に、随分仲良くなってるじゃねーか。そーしてつとマジで親子みてエだぜ」

そして直ぐ様にやにやと嫌らしい笑みに変えて言ってる。スヴェンはむつと顔をしかめて「うるせエ」とこちらを睨んだ。しかしその目に迫力はなく、どうやら照れているだけのようだった。

「さてと、アイスも食ったし、そろそろ行くか！」

数分後、少女がアイスクリームを食べ終わるのを待って スヴェンによると、どうやら少女はアイスクリームを食べたことがなかったらしい、スヴェンが腰を上げる。

「え、ちよつと、俺まだ食べ終わってないんだけど」

銀時が半分残った自分のアイスクリームを指差す。

「知るか。さっさと食わねエお前が悪い」

スヴェンはつれない態度で抗議を却下する。

「だって俺知覚過敏だし」

「ならアイスなんざ食うなよ！」

「人が食べてるモンって、なんか無性に食いたくならねエ？」

「小学生か！ …… もう知らん！ ほら、あんなのほつといて行

くぜ」

疲れたのか、スヴェンは会話を切り上げ、少女に声を掛ける。
少女は銀時を気にするようにちらりと一瞥するが、スヴェンの手招きに従い、ベンチを下りた。

「じゃ、俺アイス食ったら宿に戻ってるわ」

銀時がスヴェンの背中に、片手を口の横に添えてその声を掛ける
と、彼は面倒臭さそうに手をぶらぶらと振って応えた。

銀時は二人を見えなくなるまで見送った。そして、溶けて流れ出したアイスクリームに気が付き、慌てて舐めとった。

スヴェンは少女を連れて街道に出る。

「どつするの？」

少女がスヴェンの横を、ちょこちょこ付いて歩きながら訊いて来た。

「そうだな……。一通り歩いてみて、お前の見覚えのある景色が
なけりや警察に任せるしかねエな。俺もそんなに暇じゃねエし……」

「けいさつ？」

「ああ。余り個人的には行きたくねエがなア……」

スヴェンは少々渋い顔で煙草を唇に挟んだ。

「おじさまがいったよ。けいさつはテキだって……」

「おじさま？」

手掛かりになるかもしれないと思い、詳しく聞き出そうとしたが、その考えは前方で響いた車のブレーキ音に掻き消された。

その黒い高級車からは”如何にも”と云った黒スーツの男たちが数人降りた。その内の一人が、素早く後部席の戸を開く。

「反応は近いです、トルネオ様」

「うむ」

そこから降り立ったのは、左のこめかみに大きな傷を持つ、初老の男。

（トルネオ!?!）

スヴェンは驚きに目を見開いた。

（何で奴がここに……。トレインのバカ、何かドジリやがったのか!?!）

焦りと不安を覚えた刹那、トルネオと少女の目が合った。

（スキだらけだ。今ならやれる!）

スヴェンは一瞬で判断し、懐に手を突っ込んだ。

「動くな、トルネオ！」

素早く抜いた銃をトルネオに突き付ける。

「掃除屋だ。お前を確保する！！！」

「スヴェン！ 離れろ！！！」

背後から、鋭い喚声が飛んだ。

第捌廻：類は友が分かる（後書き）

文中の『』（空白）はわざとです。

空白に当て嵌まる言葉は、読者の皆様のご想像にお任せします。たぶん嵌まる言葉は中盤以降に出て来ると思います。たぶん。

さて、ここでもうでも良いネタをひとつ。

つい先程、原作『BLACK CAT』の一卷を読み返しておりました。

すると、あるページのあるコマに目が止まりました。そこはスヴェンが携帯電話（厳密にはトレインにですが）に怒鳴っているシーン。

……スヴェンのケータイストラップ……フオーザ様なんですね……しかもストラップのあのヒモ（？）部分には……。

……では、次回もお会い出来ることを祈りつつ。

次回更新まで少し間が空くかもしれません。ご了承下さいませ。

第玖廻：涙の理由（わけ）（前書き）

お久しぶりです。

閲覧、誠にありがとうございます。

大変お待たせ……してるのでしょうか？

待ってねえよ、という方は、すみません。

待っていて下さった方も、すみません。

ただでさえ纏まらない文が、中々話が纏まらなくて……。

感想を下さった武士堂さま、元・配達人さま、本当にありがとうございます。
ございました。

第玖廻：涙の理由（わけ）

飛沫が舞い、あかに沈む。

見えた空は虚しい程に、ただただあおかった。

第玖廻 涙の理由

「うっ……」

スヴェンは小さな呻きを漏らし、重い瞼をこじ開けた。

「よオ。やっとお目覚めか」

ぼんやりと天井を見つめていると、不意に声が掛けられた。首を左に回すと、そこには椅子に腰掛け、特大サイズのプリンを頬張る白髪頭の男。

「……ギントキ？」

銀時は「おう」と、容器に目を落としたまま返事を返した。スヴェンは目だけを動かし、辺りを見渡す。

(ここは……宿、か)

同時に、自分は今部屋のベッドに寝かせられていることに気がつく。

”あれから” 自分は気絶して、ここに運ばれたのか。

状況を理解し、軽く舌を鳴らす。自分の不甲斐なさに沸く苛立ちを紛らわそうと、一服する為に身体を起こすが、

「うぐっ……」

腹部に燃えるような激痛が走り、ぐっ顔をしかめた。

見ると、胸から下腹部に掛けて包帯が何十にも巻かれており、その白地には赤黒いものが滲んでいた。

「オイオイ、あんま無茶すんなよ。傷が開くぞ」

銀時は呆れた様に言うと、プリンの容器をテーブルに置き、脇にあつたビニール袋の中身を提示する。

「コレ、痛み止めだよ。飲んどけ」

ぼいとミネラルウォーターと、病院で処方されるような紙の薬袋とを投げて寄越した。

スヴェンは暫し無言でそれらを見つめていたが、短い嘆息の後、袋から錠剤を取り出し、口に含んで水で流し込んだ。大量に血を失ったせいで喉が渴いていたのか、中身を全て飲み干してしまった。ふうと一息付いたところで、今度はワイシャツと、灰皿、煙草、ライターをいっぺんに投げ渡された。スヴェンは黙ってシャツの袖に腕を通す。前は開けたままにして、煙草に手をつける。そして再び

ベッドに仰向きに寝転がり、何かを思案するように、じつと天井を見つめたまま動かなくなってしまった。

銀時は暫く静観していたが、ゆっくりと食べかけのプリンに手を伸ばす。

そして、思い返していた。

〓〓〓〓

スヴェンと少女の二人と別れた直後、噴水広場にて。銀時はアイスクリームを片手に溜め息をついた。それは半ば、安堵に近い。

銀時は彼らと、敢えて別行動をとっていた。別に面倒臭さかったとかではなく、何となく、ひとりになりたかったのだ。

理由を問われても、自分でも解らない。ただ、何となく、である。だから彼は スヴェンが銀時を置いていくことを想定して、敢えていつもよりも味わってアイスクリームを食べた。知覚過敏など、殆ど言い訳でしかないのだ。

「……ハア」

二度目の嘆息の後、ふと空を見上げる。少し雲が多い気がするが、とても良い天気だ。降り注ぐ陽光が心地好い。

そんなことを考えながら、ぼんやりと、空を舞う鳥たちを眺めた。それがいけなかった。

意識が手元に回らず、コーンを傾けてしまったのだ。暖かな陽気により、いつもより数段早く溶け出したアイスクリームは当然、重力に従い、地に吸い寄せられる。

銀時が気付いた頃には、白地の着流しに、べったりと半分溶けたアイスクリームが乗ってしまった後だった。因みに、黒い粒の混じったクリーム色と、ピンクのマーブル色に染まった。

「……………えっ、ちょ……………俺のアイスがアアア！」

コーンを握り潰し、絶叫した。通行人や鳩は皆、驚いて銀時を見る。

しかし銀時はそんな周囲の反応を気にも留めず、がくりと肩を落とす。

「……………今日は厄日か？」

まだ大したことも起こっていない気もするが。

銀時は着流しの上の物体を落とさないように端を摘み、広場の外れ、敷地の片隅にある水道へと向かった。コーンは鳥たちにやり、アイスクリームは、仕方がないので水で流すことにした。

蛇口を捻り、汚れた部分をつまんで洗う。ある程度は落ちたが、それでも染みは残った。しっかりとつきりと、ピンクの染みだけが。

「……………オイオイ、着替えねエんだぞ俺。セオリーに乗っ取って同じ服四着持つてる設定とかあんのに今は替えねエんだぞチクショー。クロスオーバーとはいえ、今さら別の衣装着るとか有り得ねエ選択だぞ。どーすんだよコレ、主人公が食べ零しの染み付き衣装とか残念過ぎるだろ。今までは夜の間に洗濯したりで騙し騙しやってたけどさあ……………」

「動くな、トルネオ！」

「…！」

ぶつくさと長い長い眩きを漏らしていると、目の前の植え込みの向こうから、聞き覚えのある声が聴こえてきた。

「掃除屋だ。お前を確保する!!」

(……スヴェン?)

まだ近くをうろついていたのか。それにしても、今の言葉……目^{トル}標^{ネオ}を見付けたのか。何にせよ、そうとなれば一応協力しなければならぬだろう。奴は生体兵器を所持していると聞いたところだ。そう思つて、低い柵と植え込みの間からそつと顔を覗かせた。すると、手前の歩道の少し先に、スヴェンと少女の後ろ姿があった。その少し向こうにトルネオと、数人のボディーガードらしき男たちも確認出来た。

(……さて、行きますか)

そう思い、柵を越えようと手を掛けた、その瞬間。

「なっ……!?!」

銀時は見た。少女の腕が、奇妙な音を立てながら ” 鈍色の刃物へと変形して行く ” のを。

この距離では間に合わない。木刀を投げるにも、植木が邪魔で届かない。

彼は、咄嗟に叫んだ。

「スヴェン! 離れろ!!」

しかし、遅かった。

「やれ、イヴ！」

トルネオはにたりと笑うと、スヴェンが反応するより早く、そう命じた。

すると少女は自分の身体ごとスヴェンに突進した。異形の左腕を突き出して。

「がつ！」

スヴェンの腹部を、大きな刃が貫いた。

「ツらアアア！」

柵を飛び越えた銀時は、雄叫びを上げて少女に向かって駆け、木刀を振り下ろした。少女は素速くスヴェンから刃を抜き、後ろへと跳んだ。銀時自身、これは威嚇のつもりで放った一撃であった為、少女には当たらず、石畳を粉碎しただけだった。

「なっ!?!」

「き、木の棒で！」

「何なんだアイツ!?!」

スーツの男たちは驚愕し、動きを止めた。

ぱらぱらと鮮血と破片が舞う中、スヴェンはその場に倒れ伏した。銀時はさっとスヴェンと少女の間に立ち、木刀を構え直す。

「……………ギン……………トキ？」

「よう。生きてっか？」

銀時は少女や男たちを見据えたまま聞く。

「ごぼっ！ …… ああ、何とか、な……」

スヴェンは口から血を流しながらも応えた。意識はあるが、早く止血をしなければ危険だろう。

（さて、どうしたもんか）

この程度、銀時一人なら簡単に逃げ切れるだろう。しかし負傷した大のおとなを連れて、しかも全員銃を所持している相手から逃げるとなれば、話は別だ。

男たちはトルネオの前に守るように立ち、各々に銃をこちらへ向けていた。

ちらりと周囲に目を配ると、通行人が悲鳴を上げながら逃げているのが見えた。

「……とにかく、早いとこずらかるぜ」

銀時は小さく告げると、力強く踏み出す。

「やれー！」

トルネオの号令と共に、男たちは一斉に発砲した。

銀時は一際強く踏み込むと、木刀を思い切り振り抜き、バツティ

ングの要領で銃弾を打ち返した。そしてそれらは男たちの元へと跳ね返る。

「どわっ!」「ぎゃあ!」「うわあ!」

その何発かが、男たちの内、三、四人の手足を貫いた。

「チッ! イヴ! あの男も殺せ!」

トルネオは忌ましましげに舌打ちをすると、少女に命じる。しかし少女は躊躇うように二の足を踏んだだけで、動こうとはしなかった。

銀時はその隙にバックステップで後退。素速くスヴェンを担ぎ、近くの路地へと逃げ込む。

「ま、待て!」

運良く弾丸を浴びずにすんだ者たちが、慌てて追い掛けて来た。それに気付いたスヴェンは懐から銀色の円筒を取り出し、上部のセーフトイを外して、トルネオたちの方へと放った。

カン、と軽い音を立てて石畳の上に落ちると、円筒の継ぎ目から勢い良く白煙が噴き出した。

「さ、催涙ガスっ」

悲鳴を上げながら激しく咳込む声を背に、銀時はその場を後にした。

|| || || ||

ふとそこで回想を止める。廊下から、話し声が聴こえたのだ。

「おおっ、スヴェン！目が覚めたかア！」

部屋の扉が開き、紙袋を抱えたトレインとリンズレットが戻ってきた。

「ああ。まだ血が足りなくてクラクラするが……生きてるらしいな」

スヴェンはくわえ煙草のままに答えた。

何となくリンズレットに目を向けると、彼女は驚いたようにスヴェンを凝視している。

それはそうだろう。スヴェンの怪我は 急所を逸れてたとはいえ、いつ死んでもおかしくはない程の大怪我だったのだ。にも拘わらず、この男はたった半日で意識が戻ったのだから。

「リンズレットに感謝しとけよ、スヴェン。この女がお前を担いだ迷子のギントキを見付けてくれなかったら、今頃天国か地獄だぜ」

「何？」

スヴェンは半目で銀時を睨む。

銀時はそれに慌てて弁解を開始した。

「ちょ、おま、やめろ、そんな目で俺を見るな！俺、あいつら撒こうとお前抱えたまま必死に走ったんだよ！俺、頑張ったん

だよ!? 仕方ねーじゃんあの道予想外に入り組んでたんだから!
土地勘ないんだから! 初の戦闘だったんだから、ちよつとくら
い余韻に浸ってはしゃいでもいいじゃん!」

「お前……一番最後の聞き捨てならねーな」

スヴェンは額に青筋を浮かべ、後で銀時をぶん殴る決意をした。
そして、リンスレットに視線を移す。

「てめーに借りを作っちゃまうとはな。一応礼は言っとくぜ」

「フン。偶然あの道を通り掛かったら、アンタたちを見付けただ
けよ。一応同盟組んでんだし、見捨てる訳にはいかないでしょ?」

リンスレットはどこか照れたように顔を背ける。
それを見た銀時は訊いた。

「ツンデレ?」

「誰がツンデレよ!」

トレインはそんな二人のやり取りをけらけらと笑い飛ばすと、「
さてと」と抱えていた紙袋をテーブルに置く。見た目に反して、ゴ
トリと少々重々しい音がした。

「? 何だそりゃ」

「弾薬を仕入れて来たのさ。今夜、奴の屋敷に乗り込むことにし

たんでな」

その言葉に、スヴェンは反応を示す。

「スヴェンは此処で休んでろよ。俺とギントキがしっかりあのデブ（トルネオ）捕まえて来てやつから……」

「俺も行く！」

言いながらスヴェンは、勢い良く起き上がった。

「……何？」

トレインは浮かべていた笑みを消し、眼を細めた。

「今頃アイツも、トルネオに連れられて屋敷に戻っているはずだ。俺はもう一度、アイツに会わなきゃならねエ。会って、言わなきゃならねエことがある……！」

銀時はスヴェンを、いつものように、ぼんやりと見つめた。

「何言ってるのよ！ その傷じゃ……」

「ちょっと黙ってる」

視点を変えぬまま、銀時はリンスレットを諫める。彼女はむっとしながらも、素直に閉口した。

「……」
「アイツ」
「つてのは『イヴ』のことだな。大体のことはギントキに聞いたが……あのガキがそこまで気になる理由はなんだ？」

暫しの睨み合いの後、トレインが静かに問う。

「……」

スヴェンは数秒の間の後、

「……今は、話す気にはならねえ。悪イが……」

申し訳なさそうに、それだけ言った。

「じゃ、俺もさっさと仕度すつか」

銀時は、トレインが再び口を開く前にそう言うと、プリンを掻き込んだ。

「は？」

「『』は『』じゃねえよ。どっちにせよ、今からあのロリコンジギイんどこ乗り込むんだろ。俺、ちよっくら出てくるわ」

のっそりと立ち上がり、壁に立てかけていた木刀を腰に刺す。

「ちよつと、ギントキ!？」

リンスレットを無視して、背を向けたままにひらひらと手を振り、

部屋を出る。安っぽい絨毯を踏み締め、ゆつくりと廊下を進む。廊下では、天井のスピーカーから、弦楽四重奏が流れていた。円舞曲^{ルッ}のような曲名は知らない。もしかしたらこの国ではポピュラーなものなのかもしれないが、別世界の住人であり、そうでなくとも音楽にかける興味がない銀時が知っている訳がないが。そんなどうでも良いことを考えている内に、ふと、”あの時”の記憶が蘇る。

『……………』

これはトレインたちに話してはいないが、あの時、銀時は しておそらくスヴェンも 見ていた。スヴェンを刺した瞬間、まるで磁器人形^{ビスク・ドール}のような少女の硝子玉^{ひとみ}から零れたものを。

無表情のまま流した、透明な雫を。

涙を。

「……………ちっ。胸糞悪い」

銀時は忌ま忌ましげに毒づくと、白髪を引っ掻き回した。

気が付くと、いつの間にやらロビーまで来ていた。そのまま、エントランスへと足を向ける。

自動ドアを潜ると、心地よい夜風が頬を撫でた。

脇の花壇の縁に腰掛け、空を仰ぐ。くろい空には、幾億もの星が瞬いていた。江戸と似た、けれども、江戸とは全く違う、星空。

ふう、とゆつくりと長い息を吐く。

何かが似ている訳ではない。ただ、歳が近いだけ。子供なだけ。

それだけで、思い出してしまった。元の世界に置いてきてしまった、こどもたちを。

「……今頃アイツら、どうしてンのかねエ……」

小さな小さな呟きは、風に流れて、消えた。

「……たく、てめエってヤツは。とことんムカつく野郎だぜ」

「そう怒るなよ、スヴェンちゃん」

スヴェンは帽子を被り直しながら、「フン」と鼻を鳴らした。

あれから一時間後、銀時、トレイン、スヴェンの三名は、トルネオ邸の門前にいた。

話には聞いていたが、六、七メートルはあろうかという分厚い白壁に囲まれた、とてつもなく広く、大きな屋敷だ。老人が一体何に使うのか、庭にはプールまであるらしい。

因みに、何故スヴェンがこんなにも不機嫌なのかと言うと、どうやら、トレインの提案で行った、ハーデイス装飾銃を使った度胸試しのせいらしい。その結果によって、スヴェンの同行を認めると言う賭けをしたのだが、まんまとトレインのおふざけに嵌まってしまったのだという。その為に、スヴェンの機嫌を損ねてしまったようなのだ。詳しくは、途中で面倒臭さくなって聞き流した為に、余り覚えていない。

「で、どうする？」

「ブチ抜くさ。トルネオとイヴの所までな……！」

「派手な喧嘩になりそうだなオイ」

銀時はそう言うと、いきなり走り出し 門を蹴破った。

「たーのもオオ！！ 掃除屋でエエす！！」

「オイイ！！ テメーが派手にしてんじゃねーかアア！！」

スヴェンは銀時の奇行に眼を剥き、

「ははっ、本当にブチ抜いたら」

トレインは相も変わらず呑気に笑う。

「んじゃ、ギントキに遅れを取らねエように……行くか」

「……ああ！」

三人は、駆け出した。

第玖廻：涙の理由（わけ）（後書き）

次回、本当にトルネオ邸突入します。

……戦闘シーン、頑張ります。

では、次回もお会い出来ることを祈りつつ。

第拾廻：自由は自分の手で掴むもの 【前編】（前書き）

閲覧誠にありがとうございます。

お久しぶりすぎて申し訳ありません。ひと月ぶりですか…。リアル多忙と文章が纏まらない罫にどっぷりとはまっております。お気に入り登録を下さっている方々、すみませんでした。この長期停滞期に登録・評価して下さった方、本当にありがとうございます。

そして神威銀時さま、武士堂さま、感想誠にありがとうございます。

では前書きはそこそこに。

第拾廻：自由は自分の手で掴むもの 【前編】

しろいそのひとは地を蹴り、刃を振るう。

くろいそのひとは硝煙の中で、銃を構える。

大切なおもいを護る為に。

第拾廻 自由は自分の手で掴むもの 前編

リンスレットは銀時たちが突入した屋敷の正門とは逆方向 裏
手へと回っていた。

「……色んな意味でハデに始めたようね……」

銀時らしき声と重厚な扉を蹴破ったような轟音を聞き、若干呆れ
を含んだ呟きを漏らした。

「ま、それでこそアンタたちと組んだかいはあるってもんね。…
…さてと」

リンスレットは屋敷を取り囲む高い白壁の上に立ち、屋敷に向か

つて、手に持つ銃の引き金を引く。ボシュツ、という控え目な音を放ち、銃口からは弾丸ではなく、ロープが結ばれた吸盤が射出される。それは庭を横切り、邸宅の壁へとへばり付く。ロープを二、三度強く引き、吸盤がしっかりと固定されているかを確認する。どうやら大丈夫のようだ。リンスレットは不敵な笑みを浮かべた。

「ボウヤたちに警備の目が向いてる間に、データは頂くわよ。トルネオさん」

「どうしたというのだ、イヴ？」

トルネオは、椅子に座ったまま俯く少女 イヴに問い掛けた。

「まだ、昼間あの帽子の男を ” 殺した ” ことを気にしておるのか。お前らしくもない。あの男は、わしを捕らえようとした掃除屋^きだ」

闇の商人はのそりと少女に歩み寄ると、耳元で囁いた。

「お前はわしの命令に従って、敵を仕留めた。白髪の男は取り逃がしたが、それはそれだ。お前の力を見た以上、二度とわしを狙おうなどと愚かな考えは起こさんだろうからな。……事前にあの男たちと何があったかは知らんが、全て忘れろ。お前には必要のないことなのだ」

その時、無表情なイヴの瞳に、涙が滲んだ。
それを見たトルネオは額に青筋を浮かべ、彼女の頬を殴り付けた。

「お前に涙など必要ない！ わしの言う通りに能力を駆使し、敵を殺せば良いのだ！」

しかしそれでもイヴは、何も反応を示さなかった。それは何処か投げやりな 否、反抗的な態度だった。今までの、人形そのものだった彼女ではありえないことだ。

(……イヴめ。殺人人形の分際で、自我が目覚め始めているというのか？ 外でどんな刺激を受けたか知らんが、このままでは『兵器』としての応用に問題が生じるぞ)

トルネオが苛々と思考に耽っていると、部屋の扉が乱暴に開かれた。

「トルネオ様！」

オカッパ頭と下睫毛が特徴的な部下、フリットだった。

彼は主人に対する挨拶も忘れる程に慌てた様子で、早口にまくし立てる。

「掃除屋です！ 例の掃除屋が、正門を破って邸内に……！」

「何イ！？」

イヴは少しだけ、顔を上げた。

邸内では、激しい銃撃戦が繰り広げられていた。

屋敷を警備する黒いスーツの男たちはそれぞれ銃を手に、侵入者

の排除へ向かう。話によると、敵は昼間屋敷に忍び込んだ黒髪の掃除屋と、脱走したイヴを連れていた眼帯の掃除屋、そして拳銃の弾を木の剣で弾いてみせたという妙な格好をした白髪の男の三人組らしい。

敵はなかなかの手練れのようなのだが、一人は負傷していると聞く。今までだつてこの屋敷は突破されることがないのだ。数だつて、こちらが勝っている。楽な仕事だ。

そう、思っていた。

……しかし現実には、まるで予想外の展開を迎えていた。

ばすつ。

黒スーツ集団の一人が脚を撃ち抜かれ、固い大理石の床に倒れ込んだ。

「ぐああっ！」

「痛エ……………」

「ぐあ……………」

呻き、蹲るスーツたちの真ん中に立つ男が、二人いた。

「後から後から……………。キリがねエなア」

そのうちの一人、トレインが、愛銃から立ち上る煙を吹き消した。

「おいトレイン、ちゃんと外して撃ってるだろうな？」

そしてもう一人の銜え煙草の男、スヴェンが訊いた。

「トーゼンだろ。一人も殺っちゃいねエよ。殺したら報酬ギャラが減つ

ちまっもんな」

「フン。 それにしても」

スヴェンはついと前方に目を馳せた。

「ここまで強かったなんてな。 アイツ」

廊下には、打撲傷を負い気絶したスーツの男たちが、累々と横たわっている。そして更にその先、硝煙により白濁した世界の向こう側に、鋭い発砲音と、鈍い打撃音の中を翔ける『しろ』があった。

「がっ！」

「うあッ！！」

「コイツ……ぐあッ！」

跳んで、弾いて、蹴って、かわして、回って 斬る。

風にそよぐ柳のようにしなやかに、宙を漂う雲のように滑らかに、しかし、何もかもを吹き飛ばす嵐のように荒々しい、その剣劇。

……見くびっていた訳ではない。トレインにもスヴェンにも、相手を見極める“眼”はある。彼の鍛え上げられたその身体と手の平の胼胝たじを見た時から、既に予想はしていた スヴェンに至っては、先刻、彼の木刀による荒業を目の当たりにしたばかりである。

戦争に参加していたと云うだけあって、やはり相当場数を踏んでいるのだということを、改めて思い知ったと云うだけのこと。

ゴッ！

「ぎゃあ……！」

最後の一人がこめかみをぶん殴られ、その場に崩れ落ちた。

「……つたく、次から次に涌いてきやがって。てめーらはGユキフイですかコノヤロー」

悠然と立つそのしろい男　銀時は、とん、と木刀を肩に乗せ、うんざりしたように言った。

あれだけ暴れていたにも関わらず、息はまるで乱れていない。せいぜい、薄く汗ばむ程度である。

「いや、例えでもゴキブリはやめてくんね？」

俺、害虫嫌いなんだよ、と顔を引き攣らせたのはトレイン。

「さつきと云い、木の剣で弾丸防ぐなんざ反則だろ……。つか、それ、本当に木か？」

スヴェンは呆れたように感想を述べ、先に進もうと一歩踏み出しかけた、その時。

「……いたぞ！」

その声と共に十数人の男が、銀時たちのいる廊下に殺到。同時に、銃弾の嵐を浴びせる。

三人は素早く横に跳び、それぞれ手近の柱に待避する。

「スヴェン！」

「何だ!？」

トレインは柱の陰からハーデイスを突き出し、敵を牽制しながら、銃声に負けないように叫ぶ。

「ここは一人で充分だ！ 先に行きな！」

「！」

「ガキに伝えることがあるんだろ？」

トレインとスヴェンは、視線を交わす。しかしそれは一瞬のこと
で、トレインは直ぐに前方に目を戻した。

「ギントキ、アンタもだ！ …… スヴェンの援護を頼む！」

銀時は短く「おー」とだけ応えた。

一呼吸の後、銀時とスヴェンは同時に飛び出し、全速力で駆け出
した。

トレインは軽く振り返り、スヴェンの背中に向かって言った。

「後でミルク十本奢れよな！」

「多すぎる。三本だ！」

「じゃ、俺はパフェ五杯で」

「何でテメーもなんだよ！」

「オメーの無茶に付き合ってたってんだろー」

「……………一杯だけな」

「ケチ！」

そんなやり取りを交わす三人の顔には、強かな笑みがあった。

一方、邸内のモニタールーム 屋敷に設置された無数の監視カメラの映像、及びその他のセキュリティシステムの管理を行う為の部屋だ にて、トルネオはモニターを睨みつけ、歯軋りをした。

「帽子の男……生きていたのか！？ しかもあの黒髪の男ともグ
ルだったとは！ わしの屋敷を何度も踏みにじりおって……おのれ
！」

トルネオは怒りに任せ、拳をコンソールに叩き付けた。

(……………そうじゃ、さん。……………ギンさん……………)

その後ろで、少女はモニターに映る二人の男を見つめていた。

「スヴェン、傷が痛むのか？」

自分より数歩後ろを走るスヴェンが腹を押さえていることに、銀時は気が付いた。

「いや、まだ大丈夫だ」

銀時は「……そうかい」とだけ言い、それ以上はもう質すことはしなかった。

スヴェンは内心で苦笑しながら、額の脂汗を拭う。

ああ答えはしたが、先刻服用した痛み止めの効果はとうに切れていたのだ。実際は、ずきずきと脈打つような鋭い激痛が、彼の腹部を襲っていた。

(……イヴ……)

彼の少女が、スヴェンの脳裏を過ぎる。

(あの時、俺は確かに見た。トルネオに命ぜられて俺を攻撃してきたアイツが、最後に見せた涙を。生体兵器か何か知らんが……アイツは望んで人殺しをしてる訳じゃねエ)

恐らく、自分が死なずに済んだのも、彼女が無意識の内に急所を外してくれたいたからなのだろう。

スヴェンは、奥歯を噛み締めた。

(きっかけさえあれば、まだアイツは『人』に戻れる。もう戻れない俺やトレインとは違うんだ……！)

ふと銀時は、僅かに眉をひそめた。

前方の丁字路の両側から、バタバタと複数の足音と怒鳴り声が、耳に届いたからだ。

段々と大きくなるその音は、確実にこちらに向かって来ていることを証明していた。

「チッ、まだ居やがるのか!」

スヴェンも気が付いたようで、苦々しげに舌打ちした。

「ったく。……一気に突っ切るぜ！」

銀時は宣言すると、速度を上げ、スヴェンの前に開かるように進み出た。

「オラ退けエエエ!!」

振り上げられた木刀が、唸りを上げた。

トレインは柱の陰から飛び出した。そして通路を横切るようにスライディング。同時に連射。それらは全て狙い通り正確に男たちの肩や腕を貫き、彼らを無力化して行った。

「がッ!」「ぐああッ!!」

勢いはそのままに、反対側の柱に滑り込む。

「ふうっ……」

全発撃ち終えたハーデイスの銃身を折り、懐から新しい弾薬を六発分取り出した。

(ったく、大人数で行く手を阻みやがって。……こうして銃声と硝煙の匂いの中になると、あの頃感覚が戻ってくるぜ。……あの頃……)

そしてそれを回転式弾倉に、一発一発、丁寧に装填して行く。

(……感覚が)

「……おい、奴の動きがなくなったぞ。逃げちまったんじゃないのか？」

あれから何の行動も示さない相手に痺れを切らした一人が、そんなことを言った。しかし他の一人が、そんな彼を諫める。

「待て。隙を伺っているのかもしれない」

それは、言い終わるか終わらないかの刹那。全身に、びりっ、と痺れるような感覚が走った。

(な……?)

突然の金縛りに戸惑っていると、今まで隠れていた黒髪の掃除屋が、静かに姿を現した。すると何故だろうか、痺れが数倍増した。いや、これは痺れるどころではない。

(何だ……?)

(体が……動かない……?)

びりびりと痛みを伴う程に鋭いその感覚は、彼らの全身の筋肉を硬直させた。誰も動くことは出来なかった。

と、掃除屋 トレインが、今まで伏せていた顔を上げた。

「ひっ!？」

男たちの喉から、引き攣った音が漏れた。

「……俺は、トルネオに用があるんだ」

その声音は普段よりもいくらか低いだけ。
しかし無表情な彼の瞳は、氷のように冷たかった。

「そこ、通して貰おうか」

そう言うと、コツ、コツ、とゆったりとした歩調で、男たちの脇を通り過ぎて行く。

その間、誰もトレインに銃を向ける者はいなかった。
銃をホルスターに納め、両手はズボンのポケットに突っ込んでいるという、どこからどう見ても無防備な状態であるにも関わらずだ。
しかし、本能で解る。

(こ、コイツ……………化物だ)

皆、彼と云う絶対強者に完全に圧倒され、指一本処か、生理的な行為である筈の瞬きや呼吸さえままならない。

ただ、否応なしに理解させられた。

(俺たちが百人束になって掛かってても……………絶対に敵わねエ……………)

その場に取り残された男たちは、完全に戦意を喪失していた。

第拾廻：自由は自分の手で掴むもの 【前編】（後書き）

今回は前・後編です。

本来一話に纏めようと思っていた所までがなかなか長かったので、分けました。

なので、今回はいつもよりも少しだけ短め。次話は恐らく少し長めとなります。

そうそう、今回は携帯の電池切れと闘っていて更新を急いだ為に書き忘れていたのですが、紅桜編、観に行きました。正直な所、アニメ（紅桜編）の記憶がかなり曖昧だったので、ああ、こんなシーンもあつたなあ、などと、観ていてとても懐かしくなりました（原作は観に行く前に読み直しましたけれど）。因みに特典は白夜叉でしたどうでもいいですねはい。

……では、次回も、なるべくなら近い内にお会いできることを祈りつつ。

第拾巻廻：自由は自分の手で掴むもの 【後編】（前書き）

閲覧ありがとうございます。

大っ変長らくお待たせしました、後編、更新でございます。

今回、行数はいつもと同じくらいですが、文字数は少し多めです。

……頑張りました、これでも。

神威銀時さま、武士堂さま、ゆりなさま、感想誠にありがとうございます。

ではこの辺りで、本編をどうぞ。

第拾壹廻：自由は自分の手で掴むもの 【後編】

十分後、トルネオ邸は全ての警備員が逃げ出し、先程の銃撃戦が嘘のように静まり返っていた。

第拾壹廻 自由は自分の手で掴むもの 後編

弾痕と血と銃器が散乱する 正確には、この状況を作り出したのは彼らなのだが 屋敷を駆け回っていた銀時とスヴェンは、中庭へ向かう人影を見つけ、それを追って外へ出た。

その庭は以外とシンプルな作りで、中心に噴水が据えられているが今は水は止められている。その噴水の前に、初老の男と銃を構えたオカツパの男、そして、金髪の少女が立っていた。

「……こんな所にいやがったか」

足を止めたスヴェンは、その場に火のついたままの煙草を吐き捨てた。

「捜したぜ……トルネオ……！」

木刀を右手に携えた銀時は無言のまま、スヴェンの数歩手前に控

えるように立つ。

「ふん、死に損ないと腰抜けめが。昼間、イヴにやられたその日のうちにここまで乗り込んでくるとは。全く、化物としか言いようがないな」

トルネオは余裕の表情で二人を嘲るように　否、嘲笑った。

「もつとも、不死身の超人という訳ではなさそうだな。顔色で分かるぞ。気力だけでここまで来たって感じだな。何が貴様をそこまでさせるのかねエ……」

にやにやと笑みを浮かべる二人の男に、スヴェンはフンと鼻を鳴らした。

「ガキに涙見せられて、そのまま黙ってオネンネってのは俺の紳士道に反するんでな！」

トルネオは笑みを消し、ぴくりと眉を跳ね上げた。

「……何？」

代わりにスヴェンは、にやりと口角を上げてみせてやった。

「俺はテメエをブツ飛ばして！　イヴを自由に……その為にここへ来たんだよ！」

数瞬の間、トルネオはさも可笑しそうに喉を鳴らした。

「……くくくく。何を言い出すかと思えば……フフフ」

そしてイヴの白い顎を軽く掴み上げる。

「イヴはわしの研究の成果であり、わしの所有物だぞ？ 自由に
するなどと、勝手にそんなことを言われても困るなア」

「……黙れ」

「!?!」

トルネオはスヴェンの低い、怒気を含んだ声に驚き、イヴから手を離す。

スヴェンはぎろりとトルネオを睨み付けた。

「自分の生き方は自分で決めるんだ。下衆ヤローに束縛する権利
はねエ!?!」

イヴははつと大きな目を見開き、トルネオは戦慄した。
なんだ、こいつは。

銃を突き付けられているこの状況で。先刻殺されかけた殺人人形
が目の前にいるこの状況でこのような態度を取る輩など、トルネオ
は知らない。

恐怖を与えるどころか、こちらが逆に気圧されている。
焦ったトルネオは、慌ててイヴに命じる。

「イヴ！ 耳を貸すなよ。奴らは死ぬんだ！ これからここで…
…」

『人形』はそんな『主人』の声を無視し、小さく息を吸った。

「……ジユウってことのイミ……よくわからないけど……」

そう言いながら、一歩踏み出す。

「それって、わたしの……すきなようにしていいの？」

「……ああ……」

スヴェンは少々驚きつつも優しげな笑みを浮かべ、頷いてやった。

「もう……ひとをころさなくていいのかな……？」

少女は、初めて逢った時とは違う真っ直ぐな瞳で、スヴェンの隻眼を見つめる。

「……ああ」

再び、しかし先程よりも力強く頷いた。

「じゃあ、わたし……ジユウがいい」

言葉としてはまだまだただどしいが、今まで聴いたことがない程に、はつきりとそう言った。兵器と呼ばれた少女は今確かに、一人の人間として、自分の道を選んだ。

それ見て、スヴェンも、今まで無表情を貫いていた銀時も笑顔を浮かべた。

しかし安心したのもつかの間。トルネオがイヴを乱暴に引き寄せ、懐から一本の注射器を取り出して叫んだ。

「そうはいくか！ お前を生み出す為に、数十億イエンの巨費を

投じたのだ!!」

「貴様っ……………」

「動くなッ!!」　そこで見ている、掃除屋。このN・S剤で、イヴが人工人類としての真価を発揮するところをな……………」

「え?　S・M剤?」

こんな状況にも動じず、いつものようにぼけっとこんなことを呟く銀時に、スヴェンのみならずトルネオ、フリットまでもがシャウトした。

「N・S剤だ!　エ・ヌ・エ・ス・ざ・い!!　なんだその違う意味でアブなそうな薬!？」

「やっと喋ったと思ったたら何だそれは!？　ていうかどんな聞き間違いだ!？」

「それよりこんな状況でよくボケられるな貴様!!」

それぞれ順に、そんなツッコミを繰り出した。タイミング的にもなんか、意外と息ピッタリだった。

「……………N・S剤とは、イヴの体内に存在する数億個のナノマシンを暴走させ、肉体変化能力を最大まで引き出すことを実現する薬だ。同時に、イヴの脳の活動を著しく低下させる」

咳ばらいひとつ、フリットは丁寧に説明してくれた。依然、こちらに銃を向けたままだが。

その後を、同じく気を取り直したトルネオが引き継ぐ。

「つまり……わしの命令を忠実に従う催眠状態に陥る訳だ。そして、肉体は戦闘に適した化物に変わる。くくく、見物だぞ。元に戻る保証がないのが難点だがな」

銀時は一瞬だけ、いつもの濁った眼を細めた。

ぶっちゃけ何だかよくは解らないが、相当やばい代物であることは理解した。

「へーえ、そりゃアすげーな。けどオメー、そりゃ典型的な悪役の台詞だぞ」

脈絡のない言葉にトルネオは一瞬変な顔をするが、負け惜しみか何かだろうと取ったのかにやりと笑い、藻掻くイヴの首筋に注射器の針をぐいと近付ける。

「さアイヴ、見せておくれ。お前の本当の力を……」

「やめ……！？」

駆け出そうとするスヴェンの肩を、銀時が掴んで止める。

「ギントキッ！？」

「……でもまあ、アレだな」

その腕を振りほどこうと抗議の声を上げるが、銀時は遮るように言葉を続ける。そしてじつと月を見上げながら、悪戯の成功した子供のような笑みを浮かべて言った。

「そういう台詞が出たっつーことは、」

刹那、銃声が轟いた。その直後、ぱん、と軽い破裂音と共に、トルネオが持つ注射器が粉々に砕けた。一発の弾丸が、注射器を撃ち抜いたのだ。

「おお！！ なっ………！？」

皆が狙撃者を探し、屋敷の屋上を仰いだ。
そんな空間に、銀時のどこまでも冷静な声が響く。

「イコール、一瞬で成敗されるフラグが立ったっつーこったな」

屋上^ルには、満月をバックに立つ野良猫が一匹。

「残念」

一言、その猫　トレインは白煙が立ち上る銃口を向けたまま、
歌うように言った。

「グッジョーブトレイン」

銀時はトレインに親指を立てた。そして同時に、軽くスヴェンの背を押し出す。何事かと銀時を見ると、にやつ、と下品な笑みを浮かべた。スヴェンはその表情を見て、彼が何を言わんとしているかを瞬時に理解した。そして直後、スヴェンは駆け出した。

「き、貴様は………！」

トルネオの気が逸れている。好機は今だ。

スヴェンは傷口が痛むのも構わず拳を固め、トルネオを渾身の力

で殴り飛ばした。そして、トルネオの手から解放されたイヴをそのまま抱き留める。

トルネオの体は数メートル先までふっ飛び、石畳の上に無様に落下した。

「トルネオ様ア！！ おのれエっ！！」

激昂したフリットはスヴェンとイヴに銃口を向けるが、

「おい」

「！！」

いきなり後頭部が何かに締め付けられたかと思うと、急にぐんと地面が近くなった。

「え……おぶっ！！」

「ごしゃっ、という奇妙な音と強烈な痛みと共に、フリットの意識は途絶えた。

「俺を忘れて貰っちゃア困るなア」

銀時は目を回した男の頭から手を離すと、にたあと厭らしく笑った。

銀時が男の顔面を石畳に叩きつけたのであった。

（（……………ひでエ……………））

トレインもスヴェンも人のことを言えたものではないが、この時

ばかりは男に同情した。そして合掌した。イヴはその二人を不思議そうに見つめた。

「……………く、お、のれ……………」

トルネオは鼻や口から血を流しつつも、怒りで顔を醜く歪めながら身を起こした。

「おおっと、悪あがきはみっともないぜ?」

ひらりと屋上から舞い降りたトレインは、銃口をトルネオの眼前に突き付けた。

「アンタの負けだよ。チエックメイト王手だ」

トルネオは目を見開き、目の前の鈍く光る銃を凝視した。

「……………黒い装飾銃……………。そうか、やはり貴様は黒猫」ブラックキャット

トルネオは震える声で、説明臭い台詞を続けた。

「秘密結社クロノスを抜けた後、掃除人スイーパーとなったという噂を聞いたことはあつたが……………。どうりでいとも簡単にここまで突破される訳だ。……………だが」

そこで言葉を切ると、トルネオは急に余裕を気取り、にやにやと笑い始めた。

「わしに手を出せば、あの男は恐らく黙ってはいないぞ」

その様子に、トレインは怪訝そうに眉を顰める。

「あの男？」

そんなトレインを見て、トルネオは腫れ上がった頬を更に笑みの形に歪めた。

「かつての相棒の名を忘れた訳ではあるまい。……『クリード』だ！」

刹那。トレインの表情が凍り付いた。

「……………クリード……………だと……………？」

(……………?)

銀時は眉を顰めた。トレインの様子がおかしい。

トレインは突き付けていた銃口を下に向け、呆けたようにトルネオを見下ろした。

「アイツを……………知ってんのか……………？」

トルネオは不思議そうに目の前の男を見上げていた。

「うげッ!!」

突然、トレインがトルネオの首を掴み、そのまま片腕一本でその巨体を持ち上げた。

「!?!? トレイン!!」

いきなり豹変した相棒にスヴェンも慌てた。

「ゴウー!!」

しかしトレインはそれを無視し、トルネオを壁に叩き付けた。そして首を絞めつけたまま、怒りや焦りが入り混じった瞳で凄みを効かせる。

「言え！ アイツは今……何処にいる!？」

「何してんだ！ オイ、死んじまうぞ!？」

スヴェンの制止にも耳を貸さず、トレインはトルネオの喉を更に強く締め上げる。

「言わなければ……消す!!」

本気だ 殺される!

トルネオは必死に声を振り絞る。

「まで……し、らん……」

トレインは右手に携えたままだったハーデイスを持ち上げ、撃つた。

「おおあああア!!」

トルネオの叫び声と、計五発の銃声が響いた。

「か……かか……」

一瞬後には、男の顔の周りぎりぎりの壁に、五つの弾痕が穿たれていた。

「言えつて言ってたんだ……！ クリードは、」

「はアい、そーこまアでエよーっ、と」

かなり場違いな締まりのない声と共に腕を掴まれ、有無を言わせず、ぐいと強引に下ろされた。反動で手は男の首を離れた。トルネオは地面に尻餅をつき、何度かむせた。

そんなトルネオには目もくれず、トレインは邪魔をするなどその声と手の主を思い切り睨みつけるが、その本人　銀時は臆することなく、だるだると小指を耳に突っ込んで言う。

「落ち着けつつーの。俺はそのクリームが誰かは知らねエし、何があったのかも知らねエ。けどな、今ここでコイツ殺って、それで何か変わるのか？　賞金ペアになるだけだろが。お分かり？」

スヴェンが後ろから「クリードな」とツッコんだが無視し、両者は暫し睨み合う。

やがてトレインは軽く舌打ちすると、ぷいと子供の様に顔を逸らした。

「……分かってるよ」

背後で、スヴェンがほつと胸を撫で下ろした気配がした。

「わっ……わしは……」

トルネオはがたがたと震えながら続ける。

「わしはあの男の所在は知らん……。クリードは一度姿を消すと一切こちらからは連絡は取れんだ……」

すっかり怯えきったトルネオの姿を見て、血の上つた頭が次第に冷えていくのが分かった。

そうだ。手掛かりはコイツしかないのだ。冷静になれ。溜め息の後、もうひとつ気になっていたことを聞く。

「……お前とアイツの関係は？」

「てつ、定期的に、クリードにナノマシン研究のデータを提供していたんだ！ ホントにそれだけだ。あの男がそれを何に使ってもりなのかも、わしは一切知らされてはおらん……」

トレインはぎり、と歯噛みをした。

（そんなことだと思っただぜ……。だが、奴とトルネオが繋がっているのなら、ここを潰したことで奴は俺のカゲに必ず気付く。きっと何らかの動きを示してくる筈……。そのチャンス逃がさねエ……！）

「……トレイン。『クリード』ってのは例の……」

考え込むトレインに、心当たりがあるのかスヴェンが控え目に尋ねた。その時、重い爆音が、屋敷を揺るがした。

「！？ 何だ……爆発！？」

音がした方を見ると、黒煙と紅蓮の炎が漆黒の夜空を彩っていた。再度、立て続けに爆発が起こる。それを見て、トルネオはさっと青ざめた。

「あの方角は地下研究所!? まさか……」

「そのまさかよ、トルネオさん」

「!?!」

「アンタの研究データ、全部灰にさせて貰ったわ。……研究施設もろともね」

「リンス!」

いつの間に現れたのか、リンスレットが立っていた。すっきりしたと言わんばかりの笑顔を向けて。

「なっ……何だと……全部……全部、灰……!?!」

トルネオは愕然と呟き、先程とは違う種の身震いを起こしていた。

「どういうことだよ。お前の目的は、奴の研究データを盗み出すことじゃなかったのか?」

トレインは当然の質問をリンスレットに投げた。

「ホント、自分でもバカなことしたなって思ってるわ。……でもね、気に入らなかったのよ。アイツの研究」

リンスレットは心底不快そうにそれだけ言った。何を見たのかは定かではないが、ろくでもないものだったのだろうことは、その表情で容易に想像が出来た。そんなものなら、わざわざ聞いて自分たちまで不快な思いをする必要はない。第一、興味もない。

「それより、アンタたちはどうなの？ 見たところケリはついてるみたいだけど。トルネオを警察に引き渡すんでしょ？」

リンスレットは先程とは打って変わって明るい口調で言い、辺りを見渡す。

「ん？ …… ああ、そのつもりだったんだがな……」

スヴェンは少し言いにくそうに言葉を濁すと、傍らに立つ少女をちらと見遣る。

「俺たちがトルネオを引き渡したら、奴の研究の成果であるイヴの身柄は、政府が引き取ることになるだろう。……そうならきつと、今度は政府の軍事研究の格好の資料として扱われることになりかねん」

スヴェンは顔を上げ、真っすぐに銀時たちを見据えた。

「それじゃあ助け出したイミがねエ。だから俺は、一先ずイヴを連れてこのままずらかろうと思う」

「トルネオをここにほっとくってこと？」

「あの様子なら、ここに残しといっても問題ねエだろ」

スヴェンはくいつと親指で示す。
そこには、茫然と爆炎を見つめる丸々と肥えた背中。

「じき騒ぎに気付いて警察がここに来る筈だ。……後のことは任せろよ」

へらへらと笑いながらうわ言を呟くトルネオは、完全に正気を失っていた。

「あーらら。ダメだなありゃ」

ドン引きするリンスレットの隣で、銀時がどうしても良さそうに呟いた。

「……トレイン、ギントキ。そういうことで良いか？ 五千万イエンはペアになるが……」

スヴェンが申し訳なさに言うが、トレインはそんなことかとはかりに薄く笑う。

「いーよ、別に。骨折り損のくたびれ儲けには、もう慣れてる」

それにまだフィルに貰った金も結構残ってるだろ、と付け足す。
銀時も「しゃーねエな」と何だか嫌々そんな態度だが、本心は満更でもなさそうだ。

それに対してスヴェンは「そうか」と安堵の溜め息をつき、言う。

「確かに、いつものことだな」

銀時は欠伸をかきながらくると踵を返した。

「んじゃ、サツが来る前にさっさとずらかる……！」

刹那。銀時の軀が、トレインたちの脇を吹っ飛んで行った。

「えっ……」

「ガハッ……！」

銀時は数メートル先の壁に叩き付けられ、地に倒れ伏した。壁に遺った大きな亀裂が、衝撃の強さを物語っていた。

「……！」

「ギントキッ……！」

「何だ……？」

「ギンさんっ」

トレインたちは、銀時に衝撃を加えた『何か』があるであろう前方を見、驚愕した。

「……な……」

百を超えるであろう異形の怪物たちが、彼らを取り囲んでいた。

第拾巻廻：自由は自分の手で掴むもの 【後編】（後書き）

私がおもたもたしているうちに、なんとアクセスが十万を超え、現時点では十二万を突破しております。

何の変動がないにもかかわらず毎日アクセスしてくださる方がいらつしやることに、嬉しいやら申し訳ないやら……。かなり申し訳ないです。

……。あの……。頑張ります、本当に。見捨てないでください。絶対完結はさせますので。未完のままとかないのでホント。お願いします。頑張りますんで!!

さて、次話はオリジナル展開となっております。期待せずにお待ち下さいませ。

では、次回も近いうちにお会い出来ることを祈りつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7167j/>

白と黒の残像

2011年11月16日17時27分発行